ヨ 111.68
30
188

ルモアヌ著

宗教之試金石 全

東京 三才社

序

古往今來、無宗教の國なく無宗教の民なし、唯一種の例外として無宗教の個人あるのみ、現世紀は無神唯物の說の最盛に行はるゝ世紀なり、然れども未一國民を擧げて無宗教化する能はざるは是豈宗教の、人に取り、國に取りて須臾も缺く可からざる事實の明證にあらずや、

由來人心に高崇雄大なるもの、夢幻の利達之を滿快する能はず、浮雲の富貴之を充足する能はず、況や六塵の樂欲をや、若夫之をして天性自然に發展せしめむか、現界を高踏し、空間を超越し、直に無限其物(神)に向つて飛躍するものなり、果して然りとせば、人間は自然に宗教的動物と謂はざるべからず、

今日物質的の文明進歩は駸々乎として殆ど其絶頂に達せり、然れども學界の發見説が、未以て人の向上的精神を滿足せしむる能はざるは何ぞや、他莫し、未人に其本源、其性質、及其終末を語る能はざればなり、彼の神を無にし、靈を虚にして、凡ての無形物を否定し去らんとする唯物主義の如き、到底人心の要求を充足する能はざるものなり、吾人は却て其反對の結果人を猿にし(進化論)人を豕にして(快樂主義)、今日の思想界と道德界に言ふに忍びざる謬想と渾乱とを來したるを目擊耳聞するなり。

是に於て乎人事の歴史は又復茲に一轉し、今や宗教問題は道德問題と共に盛に世の識者間に提起せらるゝに至れり、世人の之に注目する者も亦漸く多し、嗚呼無神唯物の説の世を荒せるや久し、然れども其道義を紊乱し、風紀を頽敗せしめたる結果、又復有神有魂の道の人は必須缺く可からざるを知らしむるに至りたるは、亦以て多とすべきものあり。

宗教の天下民人に必要なる、それ此の如く大なるか、唯々然り、但だ吾人は茲に一の困難なる問題に逢着せるを奈何せむ、何ぞや其困難なる問題とは、他莫し、夫宗教を以て世に立つ者其數一にして足らず、而して皆曰ふ、吾教は眞理の教なりと、佛者も斯く曰ひ、基督教も斯く曰ふ、噫今日の人其眞理の教を求めんと欲せば、孰れに就て之を聽かむや。

凡ての宗教を以て皆之を眞とせむか、否、眞理は唯一、其二致なきは人の皆知悉する所、且諸宗教の相互に反目嫉親するは之が明證

とならずや、然らば凡ての宗教を以て皆僞なりとせむか、能はず、僞は眞を離れて自立獨存するものあらず、曲線は直線を、贋金は正金を、暗黑は光明を前提するが如く、虚僞も亦眞理を前提せずんば世に存立する能はざるものなり、其眞教と稱せらるゝは乃ち是れ眞教の在る有るを證明するにあらずして何ぞや、然らば則ち眞理の教は必ず唯一ならざるべからざるか、然り、是れ自然の論理なり、萬教眞ならず、萬教僞ならずとせば、眞教は唯一あるべきのみ。果して然らば、其唯一の眞教は何處に在るべき、嗚呼是れ實に吾人の研究に價すべき一大問題なり、吾友ルモアヌ氏本書『宗教の試金石』に於て此一大問題を討究檢覈せんが爲に、古今東西の諸宗教を一場に集め、上は婆羅門教より下は回々教に至るまで、大は基督本教より小は同教諸派に至るまで、一々之を試金石に上せ、研鑽研鑽又研鑽、遂に其中より渾然たる眞理の一教を發揮し、是れぞ眞に純金なれと叫ばしむるに至れり、其勞や多とすべく其効や偉とすべきなり。

余本書を閲し、先づ其議論の公平無私なるに感じ、次に其網目の秩序的なると區分の論理的なるとに感じたれども、就中其研究の方法に就て深く感ずる所ありたり、氏は一片の理論を以て先天的に之を斷論せず、歴史と實驗とに徴して、務めて後天的研究の方針を取れり、是故に空理の譏なく、獨斷の訴なく、又思想乾枯、文章無味の非議もあるとなし、歴史的事實は讀で趣味あり、實驗的證明は歴歴として掌紋を指すが如し、嗚呼是れ確に萬人の心を得たる近世

の研究法なりと謂ふべし。

之を邦文に筆せるは畏友工藤氏なり、文章明快流麗にして、些の暗點を見ず、些の難句を認めず、筆記か飜譯か、我之を知らざれども、其妙茲に到る豈欣ぶべきにあらずや。

今や宗教問題に就き、五里霧中に彷徨する者世多く之あり、豈啻愚俗のみと言はむや、堂々たる學者にして、尚且眞理の道を遠く逸出する者あり例せば彼の東西各種の宗教を打つて一丸となし、之を以て新に一の眞宗教を作らんと云ふが如き、何たる言ぞや、其兒戯の虚傲に比しきは姑く言はざるも、思はざるも亦太甚しからずや、本書若し此等學者無學者に對して其啓蒙の一助となると同時に、世の安心立命を求めむとする正意誠心の士に、眞理の光明を揮推して、其心の要求を充足するあらば、其効決して少小にあらざるなり。

明治三十四年十一月中浣教友ルモアヌ氏の需めに應じて

前田長太識

凡例

本書の事項は初め之を雜誌『天地人』に隨時掲載したるものを、今茲に蒐集して其煩を削り其要を撮りて一冊の書に約めたるものあり、然れども最初より書に著するの意を以て執筆したるものにあらざれば、今仍ほ前後相調はず、精疎相均しからぬ跡あるを免れず。

題して『宗教の試金石』と稱すれども、雜誌には『宗教研究會』の題を以て掲載したり、何れにしても東西各種の宗教を批判するの意は寓せらるゝが如し、但だその批判や難し、人は目然に其好む所に私するの癖あり、余は務めて之を避けんと欲したるが故に、故さら研究會の場に擬し、討論者數人を撰び、其一上一下の議論の下に各教の長短利害を充分主張論駁せしめたり、蓋し是れ余が議論の公平を保たんとする微意より出でたるものあり。

研究の方法に至りては空論に陷ゐるの弊を避けんが爲に、成るべく之を歴史に徴し、之を實驗に照らし、重きを事實の證明に置きて論じたり、是れ余の言を待たずして、

讀む者の自ら了解する所あらん。

儒道を茲に引來らざるは、余の見には之を宗教として認むる能はざればあり、豈啻余の見のみあらんや、多くの學者の見解も亦此に在らん、孔夫子は誰の眼にも宗教家として映ずる者にあらざるあり、其說く所倫道とは云ふを得ん、宗教とは云ふを得ざるあり。

奇蹟に就て論ずる所餘り詳密に過ぐるの嫌あきにあらざれとも、宗教の神性を論ずるには、殆ど必須唯一の道あるを如何せん、且今人の最も採用し難しとする所も亦此に在るが故に、余は尙一層之を詳論するの必要を感じたり。

人或は基督教の諸派に就きての所論餘り簡單に失して、隔靴搔痒の感あき能はずと云ふ者あらん、然れども此等諸派に就て細論せば、尨大ある一卷の書を綴るも尙足らざらん、如かず其最も著しき所を概論せんにはと、然れども餘論に掲ぐる難問は重に同派の中に行はるゝものより取りたれば、聊か所論簡單の譏を免るゝに足らんか。

明治三十四年十一月

ルモアヌ識

宗教の試金石

目次

緒言……一頁

第壹回　宗教研究の方針……四頁

第貳回　宗教研究の範圍……七頁
及び宗教の唯一なるべき理由

第參回　古代の宗教……二十四頁
宗教は內外古今の別に由て其眞僞を判すべからず。古代宗教研究の要。古代宗教に共通して現はるゝ思想。埃及、印度、波斯、希臘等の實例。

第四回　婆羅門教……三十五頁
印度に於ける婆羅門教の勢力。其教義の大要

第五回　佛教……四十三頁

宗教の試金石目次 畢

第六回　奇蹟論……五十五頁
第七回　基督教……六十七頁
（第壹）基督教の神性を論ず……六十七頁
（第貳）基督教と猶太教との關係を論ず……八十九頁
（第參）基督教と回々教との比較……百　頁
（第四）基督教諸派に就ての研鑽……百六頁
（第五）餘論及び歸結……百十八頁

宗教の試金石

ルモアヌ口演
工藤應之筆記

緒言

嗚呼現代の我日本は問題の世界なる哉、曰く社會問題、曰く政治問題、曰く經濟問題、曰く法律問題、曰く何、曰く何、問題の數ふべきもの之を當世に覓めなば、殆んど指を摟ふるに遑あらざらんとす、思想混亂の世とは云へ何ぞ夫れ問題の多きや。茲に於てか是等諸種の問題に關して到處に幾多の研究會は起され、或は古を搜りて今に照らし、或は理を究めて情を盡し、身を勞らし心を苦しめて搜索研鑽日も亦足らず、その眞を究むるに汲々乎たり。吾徒居常心を宗教の去今來に潛め、日夕敢て或は怠るなし。曩に同志數輩相議かりて宗教研究會なるものを組織す、固より一定せる教義の演述は

諸種の教會ありて各々其事に從ふが故に、是れ吾徒の關する所にあらず、吾徒が主たる目的と爲す所は、哲學に據り眞理の光明に訴へて何れの宗教の教義が果して渾然たる眞なるべきやを研究せんと欲するに在り。

倩々方今の宗教界を通觀するに、多くは枝葉末節に就て喋々し、毫も見るべき迂論愚說を喧囂するに止まり、其教義の基礎に就ては絶えて稽案する所なし。若し釋迦や孔子の徒を地下に呼び起して、之に今日を見しめんか、必ずや噱然として噴飯し、喟然として歎息し、終に末法澆季の世、道の廢れたるに落涙せずんばあらざるべし。吾徒が今の宗教界に於て奮て宗教研究會を起せるもの、決して偶然の事にあらざる也。

惟ふに宗教の問題たる、一見古色蒼然たるが如きも、常に新鮮にして活潑々地の性命を保有するは千秋不變萬古一貫といふべきあり。時に或は幾世紀の間、毫も社會の注意を惹くに至らず、教義の燻灼絶えて明らかならざるものあり、或は一世に跋扈せる學說の爲めに堙滅せられしが如く觀えしこと無きにあらずと雖も、而も學說其ものは却て人智の開發に伴ふて粉齏せられ、前の宗教問題は儼として敗墟殘趾の上に立つが如き觀あるものあり。試に思へ、人は何れより來りて何れに去らんとするものあるか、其究竟目的に達せんとするには如何ある方法を執るべきや等の問題は、代々に提起せらるゝ所にして、之を解くが爲めには、常に宗教にのみ聞くにあらずや。何れの時代に於ても、人は必ず或る最上實在（一般の稱呼に從へば即ち神）に從屬すべきものと信じ、且つ其關係に依て「人間の本末」なる問題は定まるべきものありと信憑せり。开は兎もあれ、形而上の問題を以て之を政治、經濟等の諸問題に比觀すれば、人間に與ふる必須の程度甚だ顯著たるものあり、政治や經濟や…單に理論的の問題にとゞまり、實際個人に與ふる所の影響は之を間接なりと謂ひ得べきも、之に反して形而上に關する諸多の問題に至ては、密に人間に直接し、各人の運命を定むべき關鍵を有する也。吾徒が研究會なるものを設け、大に斯に盡すあらんと欲するもの、それ斯る緊要事あるを認むればあり。

我宗教研究會は、月を閲する僅かに四、回を重ぬる十有一に出でず、期甚だ長からずと雖も、而も會員の熱心なる能く此短期の間に於て或は自己の所思を演述し、或は交互

に其所見を討論し、以て稍〻其目的を達せりき。今其筆錄せる所のものを世に公にし、大方の斯の緊要なる問題を研鑽する參考に資せんとす、若し世の思想の混亂を理する一助ともならば吾徒の望足りぬべし。

第壹回　宗教研究の方針

仲秋三五の夜、蟾魄皎かに碧空に懸り、金風桂林を渡て銀蓮庭地に生ず、天地蕭殺の氣動て人身に通り、轉た心耳の澄清を感ぜしむ、是れ幽を探り玄を鈎る教家哲士の想を錬るに最好の秋なり。此夜我研究會の第壹回は閑雅幽邃なる某高臺の一樓に開かれぬ。時鐘六點擊柝開會を報ずるや、會員は閾を排して堂に入り、各々定めの席に着く會長は徐ろに進んで壇に登り、先づ開會の辭を陳べ次で演述して曰く、

諸君、我研究會の目的とする所は、新らしき宗教を創唱せんと謂ふが如き淺薄なるものにはあらず。近時或は說を爲す者あり、曰く今日傳ふる所の古來よりの宗教は盡く朽敗し盡したるものなれば、更らに哲理の思想に一致し科學の學理に契合せる新宗教を創定するの必要ありと。既に諸多の方面より之を實地に試みしもの甚だ尠からず。彼等は其目的を達する能はざるにも拘はらず、獨その思念に失望の聲を與へざるのみあらず、軈ては大宗教家の世に出づるありて、斯新思想に適する新宗教を創唱するに至るべきを夢みつゝ在り。而して世人の多くは此宗教の創設を待つこと、恰も臥して牡丹餅の墜落を待つ如くにして、毫も自ら研究することを爲さず、斯の如くにして如何ぞ以上の如き大希望の充たさるゝことあらんや、假令これ等の人々が望む如き大哲學者大宗教家の世に出づるありて、哲學的系統を以て宗教的系統を形成することありとするも、亦は僅々少數の學者間に辨知せらるゝに止まり、決して一般の民衆に及び得べきものにあらず、其說く所はプラントン、アリストット、デカルト、カントの如く宏遠深奥なるものありとも、一部學者の間に於てすら、其反對を免かれ得ざるべく、到底一般民衆の信仰歸依を博すること能はざるべきなり、大智識大哲學者の出でゝ新宗教を創設せんことを待つは、畢竟夢想空望たるを免かれざる也。

且つや即今直ちに新宗教創設の必要を說くが如きは、甚だ順序を失せる大早計の擧措なりと云はざるを得ず、蓋し彼徒は古きものを總て腐蝕せるが如く思惟すと雖も、其は物質に屬せるもの、例せば諸種の建造物、器具等の如きは、古きに從ふて益々腐蝕

すべしと雖も、思想界に關することに至ては、一たび眞理たる以上は幾千年の歳月を經るも、其眞理たるを失ふことあきものあり。されば先づ凡ての宗教の眞僞如何を究め、若し僞なれば始めて之が改造或は創設の要を唱ふべきものにして、この眞僞如何を定むるに於ては、最も謹嚴周密なる用意を要するものなり。何が故に謹嚴周密の用意を要するかと云へば、世に宗教と稱するもの數多あり、而して其間互に共通する點あきにあらざるも、氷炭相容れざる教義の絶體的相異あるも亦事實あり、而も其信ずる者の言に據れば、互に自己の奉ずる處を以て絶體的眞理ありと爲す、其何れが實に眞正なるや容易に判知し難きものあればあり。世或は各宗教が反對を主張して眞理を爭ふを以て、總て宗教は虛僞なり妄誕ありと速斷するものありと雖も、這は大に理義に合はざる謬論なり。例へば吾人の前に二人の訟者あり、互に一箇の地處に就て其處有權を爭ひ、我は眞の所有者なり、否彼の陳述は虛僞なりと爲すを以て、直ちに此兩者を斥けて共に虛僞の主張者ありと謂ひ得べきか、斯くの如きは固より一笑にだも値せざる愚論にして、眞の所有者を定めんには、先づ豫じめ精細詳密なる觀察を下し、事實の證明に據て何れか一方の眞なるべきを判定せざるべからず。これと等しく今日各宗教家の互に主張する所を、論理的原理に照らし、十分に審査考究して、其虛妄あるものと眞正あるものとを判定せざるべからず、是れ吾徒が此研究會に於て取るべき第一の方針なり、然れば諸君は此方針に從ひて宗教の何たると教派の何たるとに係はらず、一々之を論理に照らし、最も熱誠に最も深遠に其研究を遂げ、以て吾徒が當初の志を達するに努められんことを望む、是れ余が斯會の開催劈頭に際りて、特に諸君に告ぐる所以なり。

第貳回　宗教研究の範圍 及び宗教の唯一なるべき理由

會長演述し了りて壇を退くや、會員甲某は立ちて論じて曰く、

我會長は其雄渾なる辯舌を以て、世人が新たなる宗教を建てんとするの大早計なるを警しめ、其前先づ現在の宗教中に於て、一も宗教的眞理を具備したるものなきや否やを檢覈するの要ありと論ぜられたり。是れ余の正さに言はんと欲したる所なり、蓋し

余の信ずる所に據れば、宗教的眞理と稱すべきものは、古往今來この世に現はれたる宗教の內に於て、明かに之を認むるを得べきあり。余が今此一事を以て特に諸君の注意を促す所以は、吾徒が今後の研究に當りて重大なる根據とあるべきを思へばなり。」

夫れ宗教を研究するに際りては、必ず先づ宗教とは何ぞやとの問を起し、歷史に徵し經驗に據りて之に定義を與へざるべからず。今世界各國に於て歷代の間に現はれたる凡ての宗教を一瞥する時は、其內には教義或は禮拜に於て多少の異點を發見するは勿論ありと雖も、其根本的信仰に至りては、各宗教悉く其揆を一にするを見る。即ち如何なる宗教と雖も形而上界に靈物の存在を認めざるはなく、或は一體の神と云ひ、或は八百萬の神と云ひ或は彌陀と云ひ、或は祖先の靈と云ふ等、其名稱は一ならずと雖も、兎に角、形而上なる靈物の存在を認むるは皆一なり。而して此靈物と人間との間には相感通する處あり、人間は此靈物——即ち形而上者或は最上實在——に祈禱と供物とを捧げ、而して靈物は人間を守護し、之に恩惠を施し、其罪を赦るし、人間の行爲を監視して之に賞罰の制裁を與ふる等の信仰は、一般の宗教に通じて有する處あり。一言にして之を盡くせば、人間は形而上なる靈物に對して多少從屬的關係を有する者ありとせられたり。若し此關係を無視することあらんか、そは宗教と稱ふるの資格を失ふなり。是に由て觀れば苟も宗教を以て全然人間の空想にあらずとせる以上は、必ず人間と形而上者との間に密接の關繫あるを諾せざるべからず。既に人間と形而上者との關繫を認めなば、斯る關繫の實際上に行はれたるものあるべしと推定すること論理自然の順序なり。即ち實際に於て形而上者と人間との相交通すべき道あるべきあり。例を以て之を說かんか、或國に政府ありと云はゞ、其國の主權者と國民との間には、實際上の關係あるを認めざるべからず、若し之を否まんか二者即ち離反して法律の制定も租稅の賦課も、其機關は之を見ること能はざるべく、即ち政府とは全く意味なき空語たるに歸すべきなり。之と同じく若し形而上者と人間との間には、初めより實際上の交通なく、即ち獨り人間の形而上者に對するのみならず、形而上者の人間に對して全く無關係なる時は、宗教なるものは斷えて存在すべき所由なし、即ち之なくして徒らに宗教ありと稱ふるも、そは無意義の囈語たるに過ぎざるべきあり。此點よりして古

來眞に宗教と稱すべきもの無かりしならば、今日に至りて新たに形而上者と人間との交通を索め、創めて宗教を形成せんと努むるは、蓋し徒勞に歸すと謂はざるべからず。何とあれば人間が其自力を以て恣まに自己と形而上者との關係を作くる事は、斷じて能はざる處なればあり。或國民は時として其主權者を選定して位に即かしめたることありき、然れども人間は決して形而上者を立てゝ之を最上者の位に即かしむるを得ず、況んや此最上者即ち一般に呼んで神となすものを創造し、之と人間との關係を定むるをや。故に若し形而上の最上實在者なく、從つて之と人間との關係曾て之あしとせば、人間が今新たに此關係を敎ふべき宗敎を發見せんとするは、夢の如き空想なりと謂はざるべからず。若し亦人間と最上實在との關係既に存し、互の交通既に行はれたるものなれば、既に宗敎あるものも此世界に存在したるや疑なし。要するに形而上の最上實在と人間との關係曾てより存せしものあるか、さらば宗敎は曾てより存在せざるべからず、若し亦此關係古來曾て有らざりしものあるか、さらば宗敎は世に立つべき所以あし、二中必ず其一を擇ばざるべからず。今試みに一歩を進めて余の信ずる所を論せんか、余は眞正なる宗敎の必ずや何れの所にか存在せざるべからざるを信じ、此世に有らゆる諸多の宗敎の內には、必ずや最上實在と人間との眞正なる交通の道あるべきを信ずるあり。余は今幾分か豫斷的に之を言ふと雖も、後段に至りて此豫斷の誤れるや否やを論明せんと欲す。唯茲に敢て此豫斷的の斷定を試むるは、人間界には開闢以來今日に至るまで、一般に宗敎的感情の發現を見ざるあきを以てあり。而して此宗敎的感情たるや、何時の世如何なる邦國にありても斷えず存在して、一方に抑ふれば他方に表はれ、半く人間の性質に附着し、決して消滅すべきにあらざる也、此宗敎的感情によりて人心の常に形而上者に向ふことは、譬へば猶かの磁針の常に北方に向ふが如し。磁針の北方を指すを見れば、必ず此磁針の外何物か之を吸引する原因なかるべからず、學者は此現象を見て研究したる結果、地球に磁極（マグネット、ポール）あるを發見したり。今若し形而上界なる最上實在者あしとせば、人心の此向上的傾向は遂に解すること能はざるあり。一般に之を云へば自然の傾向なるものは、磁石と人心とに區別あく、決して誤ることなし、即ちシセロの言へるが如く、『自然には誤あし』とは千古に通ずる

眞理なり。故を以て今や宗教に關して種々の研究を試むる前、先づ一般人心の內には斯の如き宗教的感情あるを見、其方向の常に最上實在に向ふを見れば、茲に最上實在の存在と、彼の世界と人間との間に密接なる關係の有るべきことゝは歸納するを得べきあり。更に他の方面に移りて論せんか、余の思惟する處によれば、眞正なる宗教即ち人間と最上實在との眞正なる關繫交通は複數あるを得ざるべく、必ずや唯一不二あらざるべからず。何とあれば最上實在即ち一般に呼んで神とあす者あらしめば、必ず其神の性質も亦一定するを見るべく、且神にして人間に交通する者ならしめば、其交通するの道や亦一定ならざるべからざればなり。故に此定まりたる神の性質に適ひ、其神の人間に對する一定の關繫に稱へる宗教のみ眞正ある宗教と謂ふべく、他の宗教にありては、此眞正なる宗教と契合せる點に於てのみ眞正あれども、之に反對せる點に於ては誤謬或は虛僞たるを免れざるなり。人の神に於けるは恰も僕の主に於けるが如き關係あるが故に、決して此二者の關係に由りて來れる宗教をば人力を以て恣まに發明若しくは變更すること能はざる也と。

會員乙某起ちて之を難じて曰く、

余は會長及甲氏の說を聞きて大ある疑團を生じたり、今少しく之を質さん。余は先づ前二氏の雄辯快利なる演說によりて、能く吾徒が研究の方針と範圍とを定め、又能く吾徒の研究を助くべき原理を示されたるを喜ぶ。余も亦宗教的感情が人間世界に斷えず發現せるの實を認め、此感情の常に最上實在に向ふを信じ、人間の想像を以て恣まに宗教を作爲すべからざるを知れり。且つや惟ふに最上實在即ち所謂神なる者は、義と眞とに無頓着あるものにあらざるべく、從つて眞の一なるが如く、義の二致なきと等しく、宗教あるものも亦必ず唯一なるべき道理なり。然れども茲に余に取りて最も了解に苦しむ一事あり。他なし、宗教とは斯の如く人間と最上實在との關係に由りて成るものゝ謂あれども、吾人人間と彼の最上實在との間には非常に深き溝渠の横はるあるを認めざるべからず。即ち吾人の感覺を以てしてはかの最上實在に關して遂に何をも知る能はず、更らに道理に稽へ哲學者の經驗に徵するも、此溝渠の彼岸に就ては頗る漠然たるを免れざるあり。されば現世と形而上界との間には一個の橋梁の

架せらるゝに非ざれば、吾人は到底此二界に交通すること能はざるべし、若し幸にして斯る橋梁あり、人間が之を渡つて彼岸に到り、其情態をば備さに觀察して再び此世に歸り得るか、又は所謂神あるものの自身此世に出現して、以て吾人の目前に歷然其狀を示しなば、吾人は明かに神と未來界との存在を信じ得べしと雖も、奈何せん古來曾てこの事なく、吾人は天文學上の器械を以て、能く幾億萬里の遠きに在る天體の奧秘に至るまで精密に觀測し得るにも拘はらず、決して形而上界の情態をば透見することは能はざるなり。未だ曾て此形而上界の消息を齎らして、冥界より飯來したる人あるを聞かざるなり。未だ曾て最上實在が自己を此人間に明かに發表したるを知らざる也。されば之此世にあらゆる人間は現世の岸頭に立ちて遙かに彼岸を望見し、以て僅かに其狀は此くも有るべしなど想像するに止まるなれ。而して其想像や時代の推移と人智の進歩に伴ふて、漸く完備の域に近づくべしと雖も、實際には現世以外の世界あるや否やを證明するの方法なく、且つ彼岸に達すべき望遠鏡の發明せらるゝことなきを以て、依然想像は想像に止まるなり。從つて宗教的研究會の如きも、單に多少道理を如めるの想像を逞うするに止まり、縱し幾分眞理に近くを得べしとするも、遂に全く之を知るに至ること斷じてなかるべきなり。故に余をして憚る處なく言はしめば前二氏の陳べられたる原理の如き、理論上より正しとするも、實際に於ては全く無益の說なりと信ぜざるを得ず。換言せば縱令最上實在にして存在するも將た宗教的感情にして正しきも、人間は以て之に到達するの舟筏なく之を滿足せしむべき客體なるものを發見し得じ、若かず其宗教的感情を滿足せしむる爲には、其時代に應じ、其智識の發達に伴ふて、自ら之に對する思想を構成するの道を講ぜんには。夫れ宗教の客觀的眞理を研究するは或は幾分の要あるべしと雖も、吾人は到底之を知悉するの期あらざるべきが故に、畢竟する所單に自己の宗教的感情を主觀的に滿足せしむるの他に方法なかるべきなり。余の思ふ處それ斯の如し、會員諸子以て如何とあす。

會長は徐かに起ちて辯ずらく

今乙氏の論ぜし處は當時の多數人士が唱ふるものを代表して遺憾なし、然れども斯る議論には大なる誤謬あるを思はざるべからず、試みに本席より之を辯ぜん。夫れ宗教

的感情なるものは深く人心に固着して何者も取て之に代るなく、是非共之を滿足せしめざれば止まざること是れ人性自然の趨向ありとす。然るに世上多くの人の情態を察するに、彼等は一に舊慣を墨守するに止まり、曾て實際如何なる宗教が客觀的に此感情に應ずるかを探究せず、唯その習慣的感情のみを枕として高臥安眠しつゝ在るが如し。斯る精神的懶惰の風は、そも何處より來れるか、疑もなく這は彼の所謂懷疑說なるものより起れるあり。蓋し懷疑の說たる近年盛んに獨逸派の哲學者に依て唱道せられ、彼國を宗とせる我邦學界の如きも、此思想の頗る汪溢せるを見る。而も此說たる決して嶄新なるものにあらず、古來屢々世の學者に唱說せられ、代々に繰返され來れるものなり。此說を以て金科玉條とあし崇奉する輩は知らず識らず古代希臘の哲學者ピーロンと同說を繰返しつゝ在るなり。渠ピーロンは此說を極端にまで論及して曰く、自己の感覺と此感覺によりて知り得るとあす事物との間には、一も相通ずべき橋梁なし、從つて吾人は客觀界を實驗するの道を有せず、故に我知覺せりとなすものは、果して實際に存在せるや否や予深く之を疑ふと、然れども人の常識あるものは此る詭辯を容るゝものにあらず。縱令此種の謬說の世に起るあるも、人の常識は自己の知覺せる事物の客觀的存在を疑はず、且つ自然を信ずること深きものあるに因り、爰に一の自然的傾向あらんか、必ずや此傾向に應ずべき客觀的存在あるべしと確信し、從つて其事物の探究に力むるあり。例せば、かの學者が磁針の常に北方に向ふを見て、何者か之を吸引する原因あかるべからずと思惟し、之が探究に從ひしが如く、又かのニュートンが林檎の地に墜つるを見て、此等の物體を地に引くものありと認め、之が研究に從事せし如し。之と同じく宗教的傾向が人性固有のものあるを見ば、正に之に應ずべきものゝ何なるかを探究するは、常識を有し理性を具ふる吾人々間の務ありとす。かの徒らに習慣的感情に安んずるが如きは、啻に精神的懶惰の極なるのみあらず、實に理性を有する吾人々間のことにあらざる也。此種の人々の信ずる所に據れば、人性自然の傾向が向ふ處の最上實在にまで達するは、迚も人間の能くし得べきことならず、從つて最上實在又は此最上實在と人間との關係に就ては、終始單に想像にのみ止まるべしと爲す。果して然か確信せば彼等は何が故に最上實在及び此最上實在と人間との

關係を講説する宗教のことに意を注ぐの煩をおすや。若しも果して人性固有の宗教的傾向にして、決して眞正なる宗教の實際に之に應ずるものなからしめば、或は究竟此る宗教は認め能ふべきものならずんば、此自然の傾向なる宗教的感情を滿足せしめんとの企望は、畢竟暗夜に距離遠き地に在る物を觀望せんとするが如く、道の攀づべきなき巉巖絶壁に登らんと努むるに均しく、實に徒勞と謂はざるを得ず。若し亦彼等は私かに心に此最上實在に達すべき方法あらんとは思惟するも、而も其方法を探尋することに力めず、措て顧みざるものなるか。然らば斯まで人生の終極に大關係ある此緊要問題に對して、懶惰の極と謂はざるを得ず。前後矛盾の譏か將た懶惰の責かは正に彼等の免かるべからざるものならずや。爰に人あり、現世かの最上實在とは決して交通あることなしと斷言せば、余は其大早計に驚かざるを得ず。蓋し此問題は正に大に研究を要すべきものなるべければ也。勿論經驗に據る時は、吾人は各々上に云へるが如き橋梁を渡りて、親しく形而上界の彼岸に在る事物を目擊すること能はずと雖も、而も最上實在の存するありて、其教即ち宗教のことを人間に、啓示するに他の道に依るは斷じて不能のことゝおすべきか。將た又最上實在は實際に曾て宗教を人間に啓示せしことあらざるか。換言せば此世界中果して最上實在より來れる教義なるものはあらざるか。此最上實在即ち所謂神自身、或は此神の選べる仲保者が、曾て之を人間に啓示せしことあらざるか。此の如きは豈不能のことならんや、此種の事の可能につきては論理上決して之を拒むを得ず。唯かゝる事の實際に有りしや否やの問題に至りては、此世に在る宗教を一々研究しつゝ、將に吾徒の究めむと欲する所あり。吾徒は此世上多數の宗教に對して夫れ如何なる研究の法を講ずべきか。余は欲す、恰かも彼の各國の政府に於て、其訂盟國より遣れる公使に對するが如くせんことを。即ち彼の公使の齎せる國書を檢して之にして謬なくば其公使を信任すると均しく、吾徒は種々の宗教に對して、何れか實に形而上界より來れるものありや、即ち其設立は果して最上實在者に據れるか、其教義は果して最上實在者の教へしものあるか、先づ之を檢せざるべからず。吾徒が研究の結果として、若し明瞭的確些の疑をも挾むべきなき天授の證據を有する宗教を發見せば、必ず之に信頼して過ちなきを得べきなり。

論じて此に到れる時、會員丙某は突如として場の一隅に起ち上り、質問と呼び次で曰く、

會長の企望や洵に好し、其說や實に論理的なるものと謂つべし。此種の研究は寔に重要なるものなれば、從つて斯く注意を加へて、愼重にその歩を進めざるべからざるは、余も能く之を諒したり。然れども其の詳細なる研究に入るに先だち、余は此に一の質疑を有す。开は他ならず、即ち余は此宗敎の精細なる研究が獨り何の効果も收め得べからずと信ずるのみならず、此探究の結果却て愈々混亂の度を加へ、倍々錯綜紛糾して、終に鶏の雌雄を論ずるが如く、孰れが眞の宗敎なるやに就て、層一層の深き惑を懷くに至らんことを恐るゝ也。故如何にと云ふに、かの阿非利加内地の野蠻部落に行はるゝが如き粗笨極まる宗敎を除きては、皆齊しく自ら我は眞正なるものなりと稱し、多少最上實在より示されたる敎義なりと主張せざる者あらざればなり。見よかの婆羅門敎なるものを、彼は其經典「伏陀」を以て、永遠にして超性なる語を含めるものなりと信じ、且つ人間以上の者より授けられたる言を有すと稱するに非ずや。殊に轉迷開悟と呼はり、斷惑と號び、專ら人智に依據して大悟徹底の境に到るを旨とすと稱する彼の佛敎に於てすら、その宗敎として世に立つ所以を檢すれば、小乘となく、大乘となく、或は彌陀を談じ或は眞如の三身を語り、輪廻轉生を說き、涅槃寂滅を言ひ、必ずや多少最上實在との關係を語らざるはなし。又翻て彼の基督敎を見よ、其敎祖基督は神より遣はされたる世の救主と信ぜらるゝあらずや。回數も亦然り、敎祖マホメットを以て神の使者なりとす。されば總ての大宗敎は、自ら我こそ眞正の宗敎なれ、我こそ最上實在の反映なれと稱するを知るべし。斯く異說紛々の間に立ちて吾人は當きに孰れにか適從すべき。若し諸君の信ずるが如く、果して眞正なる宗敎は世に唯一不二なるものならんには、此眞正なるものは、「伏陀」の敎ふるものか、釋迦の說けるものか、將た基督の立てたるものか、抑もマホメットの語れるものか。余は恐る、此研究の後、却て此等の諸大宗敎は皆齊しく同一なる價値を有すとの結論に達し、其豫期せる好果をば收め得ずして、反て一層思想界の擾亂を增加し、獨り宗敎界の進運に資せざるのみならず、反て倍々退歩の境に陷らしむるなからんかを。

言了りて徐ろに座に着くや、會長は咳一咳更らに說き進みて曰く、

若し一瞥淺層なる觀察を下す時は、或は總てのもの概ね同一なる價値の下に列なるが如く見ゆべしと雖も、然れども吾徒が茲に諸君と共に爲さんと欲する研究は、斯る淺膚なる觀察に止まるべきにあらず。公平に、愼重に、期して嚴密精確なる研究を遂げざるべからず。抑も諸多の宗教は皆同一なる價値を有すべきか、幾多の宗教中、一も他に優れたるものなかるべきか、將た一も最上實在より出でたる特徴を有するものあらざるか、宜しく先づ十分精確なる研究を盡して後ち、始めて此等の問題に確乎たる斷案を下し得べきのみ。

今や吾徒が進んで究めんと欲する所は、此幾多の宗教中果して劃然絶體的に他に秀でたるものあきか、即ち最上實在より出でしてふ明確なる標徴を有するものなきか、若し有りとせば、そは何れの宗教なりや、之を索めんとするに在り。斯る明確なる標徴を有する宗教にして、始めて彼の鑑識家が金銀寶玉等の眞僞を辨別するが如く、其眞正なるものを鑑別せらるべきなり。尙換言せば、眞正なる宗教は必ず最上實在より來りしものなるべく、即ち其宗教が吾人を關繫せしむる形而上界より出で來るべきものなれば、從つて其宗教は最上實在者の印璽の如き特徴を有せざるべからず。俗言を假りて云はゞ、此る宗教は人造にあらずして、神造なりとの明白なる證據を有せざるべからず。他の宗教は明かに人造なりとの徵證を有して、即ち人間の勢力、又は歷史或は自然の法則に據りて、其一切を說明せられ、明かに人造なりと認めらるゝに反して、所謂眞正なる宗教は、其宗祖、其擴布、其教義に於て、人間的勢力の遠く及ばざる、人間の力、自然の法則のみにては毫も說明し能はざる特徴なるものなかるべからず。約言せば吾徒が認めて最上實在者の親ら設定せし眞正の宗教となすべきものは、必ずや其印璽として他に勝れたる特徴を有し、其特徴に據て劃然他の幾多の宗教と區別せらるゝものならざるべからず。勿論斯る重要なる印璽、緊切なる特徴を檢するには、虛心平氣、叮嚀愼重、毫も偏頗なく、極めて公平に、精査細究して裁斷を下すを要す、某宗教は優秀比無きものなり、人間の力に超越せるものなり、確かに最上實在者の親しく立てしものなりとの斷案を下すに先だち、先づ其起源、其教義、之に關する詳細なる事實を探究し果して人力と自然的法則とに據て說明し能はざるや否、綿密に稽査

せざるべからず。又幾多の宗教に對して秋毫も偏頗の私心を挾さまず、各自に含蓄せる高尚偉大なる點をば、能く公平に、有りの儘に擧げて遺さゞらんことを期せざるべからず。尚終りに臨んで一言加ふべきことあり、吾徒の研究に於て取て以て資とすべき事實に就ては愼重に、嚴正に取捨撰擇して徒らに雜駁條理なき言議に陷らず、或は簡に失して主要なる部分を遺忘するが如きことなからんを期し、一國民の想像的作話等を舍て、歷史上明白なる事實のみに徵して、其特質を擧ぐべきこと是あり。此方針に據り、かの範圍に於て、吾徒は此研究の歩を進めんと欲す。諸子能く之を諒して正意正心一に眞理を眞理とし、誤謬を誤謬とするの公明正大を期し、以て吾徒が研究の目的を遂げしめよ。

第三回　古代の宗教

宗教は內外古今の別に由て其眞僞を判ずべからず。古代宗教 研究の要。古代宗教に共通して現はる〻思想。埃及、印度、波斯、希臘等の實例。

我研究會は其第壹回の集會を距る數週にして第二回の集會を開催しぬ、會員甲氏は發言の權を求め、開口先づ古代の宗教なる問題の下に、諸國民の宗教的思想に通有せる數點を論證して曰く、

諸君、吾徒は玆にこの宗教問題に對して偏なく黨なく最も公平に其研究の實を擧げんと期するにより、先づ豫斷的に、宗教の中に地の內外、時の古今等の差別を置くは頗る妥當を欠くの嫌ありと信ず。抑も外國の宗教と謂ひ、國民的宗教と謂ふが如き差別を云云するは、かの偏狹固陋なる精神より出るものにして、此る區別は固より正當なる基礎を有すべきにあらず、惟ふに宗教的思想なるものは、他の思想と均しく、特に彼此一國民の專有に屬すべきものにあらず、一般人類の通じて共有すべきものたるなり。即ち人の思想てふ者はその宗教的たると否とに拘はらず、國の境域、人種の異同等を問はず、素より精神界に屬するものなれば、人類一般に通有すべきや無論のことゝす。且つや世の所謂國民的宗教なるものも、其源に溯れば、僅々たる例外を除いて、多くは其國固有のものに非らず、曾て他國より輸入せられて、漸く其國に扶植せられしものなるを見る。例せば我邦の佛教の如き之を韓國に取り之を唐土に學べり、而して支那の佛教は曾て印度より輸入せられしものに係る。又かの基督教の如きも、今日歐米諸洲に於て其盛大を極むと雖も、其源は亞細亞洲中の猶太國より發せしものなりとす。

次に古代の宗教と近世の宗教とふ區別は世に々屢濫用せられ、從つて其意義の謬まられたるもの鮮からず。例之ばかの舊教は茲に其名の示すが如く、古色蒼然たる陳腐のものにして、現代思想の進歩に伴ふを得ず、之に反して新教なる者は刷新改正せられ生氣勃々能く日進月歩の新思想に適合すべきものなりと爲すが如し。噫奚ぞ新舊の語の、多數の人をして何の研究をも用ゐずして此る謬想を懷かしむるに力あるや。吾徒は斯の如き豫斷的區別を排し、速了的謬見を斥け、國の内外に拘らず、時の古今を論せず、眞理は何處に在るも眞理とし、虚妄は何時に於ても虚妄とし、或宗教の外國に行はれたるが故を以て、之を虚妄と斷ずるが如きことなく、又或宗教の其起源の舊きが故に、之を非眞理なりと定むるが如き僻見なからむことを期せざるべからず。夫れ西に在りて虚妄たる者は東に在りても亦虚妄たらざるべからず、古代に在りて眞理なりし者は、歳月を經るに從つて其眞理たるを失ふべきにあらず。例せば猶かの數學的眞理の如し、二に二を加へて四となるてふことは、上古に於て眞理たりしが如く今日猶眞理たり、我邦に於て眞理たると共に、歐米諸洲に於ても齊しく眞理たるを失はず。

然れば吾徒は最も公明正大なる精神を以て、既に前回に於て皈納せられし處に據り、古代より傳はれる事蹟に徴し、能ふべき丈け、古代の宗教をも溯究せざるべからず。何となれば嚮に某氏の言へるが如く、若しも果して宗教なるものは、人心自然の傾向に應じ、過ちなく客觀的存在に合ふべき實際的のものあらんには、其宗教の包有せる人と最上實在との關繫交通も亦實際に有るべきものありと斷せざるべからず、宗教にして無意義の語にあらざる以上は、人類の此世に現はれし當時より、已に此關繫交通は實際に行はれしや疑を容れず、且つ人間は國と時とによりて、漸く其交通の正道に遠かり來れりとは云へ、其關繫の眞正なる道は、何れにか其蹟の存せんこと、歴史に徴して發見するを得るならんと推定するは、當に道理に適ひしことなるべければなり。故に諸多の古代宗教を稽査して、其等宗教中に何れか眞正なるもの有らずや否やを究むるは、吾徒が企圖せる此研究に於て、必緊缺くべからざることに屬す。尚替言せば元來の舊宗教なるものは抑も如何なるものにてありしかを究むること、是れ頗る必要なりとの謂なり。尤も古代の宗教に關しては、遺物或は記録等考證の資に供すべきも

の至て乏しく、從つて世に現存する宗教を研究せる結果ほどに、明亮的確なりとはすべからざれども、而も古代國民の信仰の表現せられたる遺物に徴し、その記錄に稽ふれば、又以て當時の宗教は如何なるものありしやを知ること、敢て難しと云ふべからず。吾徒は玆に能ふ可きだけ遠く溯りて、史上に見ゆる最古の人民が有せし思想の如何を究めむと欲す。此思想の年所を閲するに從ひ、漸く世と共に推移し、或は人間の私慾に或は國民の性情に應じて、漸々變化し倍々溷濁し來らざるの前、人類一般に通有せる同一なる思想を捕捉し得ば、吾徒がこゝになさむとする研究の目的は略々達せられたるものと謂ふべきあり。譬を假りて之を解かむに、人間界に於ける宗教的思想は、猶かの行て晝夜を舍てざる河流の如きか。此河流やその源に溯れば流域一線、水も亦清冽、而も漸く流下するに從て、多數の枝流を會し、且つ行々其兩岸より受くる注瀉に由つて土砂塵芥其他の汚物を混じ、漸く溷濁腐敗して全く水源に於ける澄透璧よりも清き質をば失ひ了るに至る。吾徒の努むる處は、此土砂塵芥の混入せる濁流を措て、能ふべき限り上流に溯り、その河水固有の澄透清冽なるものを掬せむとするに在り。已に前にも陳べたる如く、此泉源や頗る遼遠、今日史籍に據て此に達すべきことは殆んど不能に屬すれば、此研究の結果として吾徒の收め得べき諸國民通有の宗教的思想も、眞正なる宗教上の眞理にして最上實在即ち處謂神或は佛より人間に啓示せられしものありとは、明確に保證し能はずと雖も、而も此人類通有の思想は殆んど眞正なる宗教の眞理に近からむものなるや推測し得べく、尚且つ吾徒の期する處は、軈て世に現存する宗教の研究の結果に據りて、此推測の實際に適合せるや否やを明かに證驗せんことに在れば、今は姑らく此研究の一段として蓋然性に止むるを以て足れりとせむ。而して此研究に於ては、專ら有名なる批評家等の確實なりと認定せる歴史的事蹟に據り、傍ら一般世人の信認せるものに依憑せむと欲するなり。

抑も最古の宗教中に第一に現はるゝ思想、即ち歴史の源流に溯るに從つて愈明白に認めらるゝ思想は、國によりて其稱呼を異にせしは勿論なりと雖も、唯一なる最上實在即ち邦語に處謂一體の神てふ觀念是なり。此者や全善にして且つ無限の威力を有し、至正至義なるものなりと爲す。支那に於ては、始め之を上帝と呼び、後代に至りて天の

語を以て之に代へたり。此天なる語義は上古に溯れば頗る限定せられ、明白にかの一體の神を指せしものあるを見得べしと雖も、漸く後世に下るに從て、其意義漸々廣汎を加へ、終に漠然たるものと化し了れり。又古代埃及にては、其史上に始めて神人の關係なる思想の現はれし當時、神に其特別なる名を附して、ヌタールと呼べるを見る。此神は即ち獨一存在にして、後世に至りて彼の國民が拜せしものには非らず。其屬性は、一體、無限、慈悲等ありとす。彼の國上古の讃歌には、此神を稱して全能者と云ひ、自ら存在し、天地を造り、覆載間有らゆる物の造者にして、眞理、又諸神の親なりと唱ふ。之に向て左の如き禱文あり。曰く

「人類の造者よ、汝は人間に生命を賦予したまひ、貧窮人に對しては其艱苦に聽き、人々の汝に向ふ時は之を憐れみ、弱き者をば扶け給ふ、願くはわれ過ち多けれども予を責め給ふ勿れ、云々」

かの婆羅門教即ち佛教を生める印度に於ても、伏陀(ヴェダ)の頌歌に神を讃して、同じ思想の發現せるを見る。曰く、

『全能なる神よ、予を憐め、予を憐め。汝稜威と光明ある神よ、予は過てり、予は甚だ弱し、予を憐め、予を憐め。予等の罪を犯す毎に、予等の知らず識らず汝の掟に背く毎に、予を罰すること勿れ』

次に波斯の上古に於けるオルムーズ神に就て語れる言を聞くに、曰く、

『オルムーズは大神なり、諸神の中の第一なる者なり、渠は天を造り、地を造れり、又人間に權利を與へり云々』

古希臘に於ても、詩人ホーメル亦歌ふて曰ふ、

『ゾース(羅馬に於けるジユピテール)は諸神と人間との親なり。此神は全能力を有す、渠ホーメルに憑て語らく「爾等總てより予は勝れて力あり、爾等擧りて力を協せ、予をオリンプス(大神の棲める處、猶我邦の高天原の如し)より引き出さむと力むるも、予優に爾等總てに勝つなりと。」』

尙かの希臘太古の史を閲するに、ドドンの市に、寺院もあり、偶像もあるゾースの祀らるゝものありきと云ふ。此ゾース神は、アリアン人種の最上の神と認められ、印度にては之を呼んでジョースと曰ひぬ。夫の有名ある梵語學者ダルメストュール氏は、印度ゼルマン種族の口碑を蒐集し、之を調査研究して曰く、「此印度種族と希臘、拉丁、ジャーマン、スカンヂナル、セルト、スラーヴ族等の相分れざるに先ち、彼等は一體ある最上の神を拜せり。此神は全能、全義、慈悲の特性を有す」と。斯の如く上古の經典、其他の事蹟に徵すれば、以上に擧げたるが如き特性を具ふる唯一の最上實在者

ありとの思想は、古代人民の間に通じて有せられたるものなるを見る。尤も當時多くの神々の拜せられざるにはあらざりしも、必ずや其中一の他に秀でたる者あり、他の諸神の親又は主人と認められぬ。斯る思想は古代に溯るに從ひ、一般に認めらるゝものなれども、後ち歲月を經るにつれ、神は漸く其數を複ね、且つ其性質も人間の慾情等を混じて漸々卑猥と化し來れり、かの羅馬の神話に、始め善惡の制裁を宰る大神なりとせられしジユピテールを以て、後ちに其親を傷けて簒奪したりと爲し、始め商賈の守護神なりとせしメルキユールを以て、後には盜賊の神と爲し、オリンプスに諸神の物を盜めりと稱し、始め美と愛の神なりとせしヴェニスを以て、後には邪淫の神と爲し、又始め酒の神とせしヴァキューズを以て、後には其臣下と共に淫蕩に耽けれりと爲せしが如きは、蓋し之が一の例なるべし。降りて後代に至るに及び、遂に一國固有の神、となり、其神を拜せし國民は漸く誤りて、其神に象どり造れる偶像に靈驗ありとなし、之をのみ拜するに至れり。而して神てふ思想は愈々降りて倍々卑しく、遂に唯視聽に觸るべきもの例せば山川草木、禽獸蟲魚、雷霆風震、日月星宿等苟くも見て以て偉大ありとし微妙なりとし怪奇なりと爲す者は、皆以て神とあすには至りしあり。如何にして此思想は斯く變化せしや、這は到底一朝夕にして研究し盡し得べきにあらず。且つ其理由を探究するは吾徒の玆に目的とする處にあらざるを以て、今は單に其事實を擧ぐるに止むるのみ。

此最上實在即ち所謂神に關する思想に次いで、諸國民に通じて認め得らるゝ宗教的思想は、靈魂の不滅、來世の存在、人間行爲の絶體的制裁に關するもの是ありとす。時としては、來世に於ける靈魂の不滅てふ觀念は、死者の靈を以て只其屍體の埋められたる邊に、影の如く幻の如く留存するものなりとあし、或は全然幸福ある所、又は不幸ある地に生存するものありとす。此に特に注意すべきは、かの輪廻轉生の說なるものは、其起源、前記の思想に比して頗る新たなること是あり。予輩は埃及初期の建築物に於ては此思想の發現せるものあるを見る。希臘に於ては、古書の中に曾て之を見ることなく、僅かに西曆前六世紀に至りて、彼國の哲學者ピタゴラスが始めて之を說けるを聞くのみ。印度に於ても、その古經典伏陀(ヴエダ)の歌には絶て之を見ざるのみあらず、

却て轉廻の思想に反對ある言さへあり。只後代に至りて此說の唱へられたるを見る。これが一證を擧げんか、かの最古の宗敎的遺書梨倶依伏陀（リグヴェダ）の中に一節あり、善人と惡人との運命を描きて曰く、

『人間の始祖即ち夜摩は永久死なざることを得しが、渠は好んで死を撰めり、渠は戻り得べからざる道に進みぬ。（爰に輪廻の思想なきや明かに見るべし）、是れ代々の人類の爲に道を開けるものなりとす、而して渠は光明の地に、天の大神ヴァルナと偕に結合して平和なる生活をなす云々』

尙同書の言ふ處に據れば、夜摩は克く高尙潔白なる生活をおせし者を其膝下に集む。彼等は榮光の身體を有し、永遠ある幸福を獲、惡人は之に反して、地獄の底に惡鬼羅刹と共に投せらると云ふ。

此他尙古代の民族中に、種々ある宗敎的思想の發現せる跡を見ること鮮からず。例せば犧牲の風習、或は上古の黃金時代、即ち人間の幸福は其絕頂に在りし時代ありきといふこと、然るに人間の過失によりて之を失へりといふこと等あり。此等の思想は希臘等の古代思想にも明かに認むるを得べし。併し此等の諸思想に超えて、諸民族一般に通有せる大思想は、前に揭げし唯一ある最上實在即ち所謂一體なる神、全能正義慈悲にして人類の主宰なる實在者ありてふ思想と、靈魂の不滅、人間行爲の來世の制裁ありてふ思想とす。

予輩は爰に豫め述べんと欲せし處を說き盡せり。されども此研究に於ては、特に結論をおすの考にあらず、又之を爲すをも好まざる也。後章に至り世上に現存する宗敎を討究せる後ち、之が結論をばおさむと欲す。併し是迄述べ來りしことも、强ち以て無用の辯を弄せしものとは爲すを得ず、何とおれば、人類の源泉に近き時代に於て、宗敎に關する思想は如何おるものなりしか、又此思想が變化を受けざるの前、或は何者も混入せざりし前は、人類一般に通有せし大思想おるもの如何等を擧示するは、後日眞正なる宗敎を索むるに方り、與つて大に力あり、頗る光明を與ふべきものありと信ずればあり。

第四回　婆羅門敎

印度に於ける婆羅門敎の勢力。其敎義の大要。
古代宗敎の研究に次いで會員戊氏が婆羅門敎に就き論ぜる所に曰く、

今や吾徒が研究の歩は次第に進みて、現代に存在せる宗教研究の一事に到達せり。予輩思ふに、阿非利加濠太利、其他未開の地に於ける幾多宗教の如きは、其宗教思想一般に卑くして、迚も之を以て今日文明國に行はれしむ可くもあらざれば、吾徒の一顧に値すべきものにあらず。吾徒は宜しく其起源の古くして其傳播せる區域の廣き大宗教を取て、この研究の課題に充てむことを期すべきあり。之を爲すに方りては、固より順に據り序に從ひ、曩に定めたる原理に照し、如何ある宗教が眞正なる宗教の特質を有するか、換言すれば如何ある宗教が、彼れの吾人を連繫せしむる最上實在者より出でしてふ明確ある印證を有するかを究めざるべからず。予輩は先づ羅婆門教に向て少しく研究を試むる所あるべし。

諸君は嘗て婆羅門教の名を耳にせしことあらむ。該教は實に佛教の母あり、佛教を產み出せし母胎あり、最も古代に起りて今に傳はれる宗教あり。予輩は今此婆羅門教に就て、極めて簡單に處見を陳述せむとは欲す。憶ふに該教も亦此研究會に於て、吾徒の研鑽せざるべからざるものならむ。蓋し該教は三千餘年の昔より傳承し來れるにも拘はらず、其勢力今猶依然として衰へず、之を信奉する者殆んど一億八千萬、かの印度に於ては遠く其後に起れる佛教すら、其教祖釋迦の入滅して未だ幾干ならず、該教の爲めに抵排せられて孤城落日の悲境に陷り、錫蘭島の一角に僅かに餘喘を保つに過ぎざるあり。かの回教の如きも、餘他の諸國に於ては駸々として其領土の擴張せるにも係らず、印度に在りては該教の爲めに其勢威を挫かれ、稀に獲たる其信徒も猶半ば婆教の信徒たるの觀ありと謂ふ。山を拔くの信あり海を掀ぐるの德化あり歐亞を蓆捲せるの餘威を以て臨める基督教すら、該教の抵抗に遭ひては頗る其擴布に障碍を感じ在るもの丶如し、該教の勢力も亦偉大なる哉。

抑も該教の起源を溯究するに、他の多くの宗教の如く、別に教祖と認めらるべき者あらず、古婆羅門教の濫觴は、一に伏陀(ヴェダ)經典と婆羅門の侶僧の教とに原つけるあり。該教の言ふ處に據れば、此伏陀經典なる者は、本と神明の啓示を含めるが如きものにあらず、只開闢以來宇宙に響ける聖語あり、此聖語往昔德の秀でたる聖人に聞え、始めて人間に傳はるに至りぬ。而も當初は唯僧院に於て口碑に傳はれるに過ぎざりしが、

後ち年を經るに從ひ、漸く聖歌の形を以て書に錄され、積んで伏陀（ワエダ）の聖經とは成れるなりと云ふ。古代の婆羅門敎に於て、第一の特質とも謂ふべきは犧牲の甚だ肝要視せられしこと是あり。即ち彼等は以爲らく、犧牲に依らば何事も求めて得られざるはなし。諸神も其任務を盡さん爲め必ずや犧牲の力に依賴せざるべからずと。尙該敎の一派の如きは傳へて、諸神は犧牲を献げて此世界を造出せりと曰ふ。惟ふに犧牲なるものは神に献げらるゝこそ其常あれ、然るに彼等は神自ら之を献ぐと云ふ。然らば必竟誰に向て献げたるものあるか。此疑問に對しては、彼の聖經一言も語る處あらざるなり。詰る處犧牲なるものは、彼等の爲には遂に絕體あるものゝ如く考へられしなり。尤も犧牲の禱文中、諸神の名の散見せらるゝものあきにしもあらずと雖も、其名の如きは總て空言たるに止まれり。夫れ此の如く該敎の禮式は諸神を卑下して、反て犧牲の捧献を司どる婆羅門の僧侶を尊貴あらしむ。即ち婆羅門の僧侶は他の人々より迥かに超絕して、最上至尊ある婆羅門神の額より產れたりとあす。而してかの武族は其胸より、商賈は其腹より、勞働者は其足より出でたりと稱へ、（按ずるに摩拏律法一卷三十一節には婆羅門神は初め其口より僧族なる婆羅門人を、次に武族なる刹帝利人を其腕より、農商即ち平民なる毘舍多人を其腹より、最後に奴隸なる輸陀羅人を其脚より生めりとあり、參考の爲茲に附記す）以てかの嚴格ある階級の制度を立つるに至れり。此思想に原いて、律法上僧侶の特權を認むること頗る大なり、例せば若し人あり、僧侶の物品を竊取するか、或は知らず識らずにもせよ、僧侶に損害を加ふるが如き時は忽ち嚴罰を課せられ、死刑に處せらるゝことさへも罕あらず。又他の人あらんには沒收又は死刑の罰に處せらるべき罪狀も、犯者もし僧侶の籍に在る時は、些額の罰金にて事を終ふ、（摩拏律法第十一章九十一節より百節迄）。甚しきに至りては、僧侶若し梨俱伏陀（リグヴェダ）全篇を知悉せる時は、縱令三世の衆生を塵殺するも何の罪科を蒙るあしと謂ふ、（摩拏（マヌ）律法第十一章二百一節。）尙國王の尊を以てすら左の誡律に服さざるを得ず、曰く、國王たる者宜しく婆羅門の僧侶を憤怒せしめざるやう戒愼すべし。彼等もし憤怒せば直ちに王と其軍隊及び其軍隊の附屬物までも滅ぼし得べし。彼等は實に他の世界と此世界及び之を宰どる神靈とを創造し、又能く諸神にその神たるを失はしめ得る者なれば、誰人か克く彼等を窘しめて幸福安穩に在り得る者あらんやと、（摩拏律法七章卅七、卅九節）。之に據て按ずるに彼等の驕傲は實に其

極に達し、自ら以て神の全能に擬するものにて、何れの代何れの國にも未だ曾て他に此類を見聞せざる所なり。即ち彼等婆羅門の僧侶は當初その拜禮せんとせし諸神を凌ぎて、自ら僭して之に代りし者と謂つべし。

次に該教は如何なることを教ふるかを見む、蓋し該教の教義や頗る茫漠として捕捉すべき處なく、且つ所謂論師なるもの輩出して、各々取る處の解釋を異にし、異論百出、元來茫漠たるもの愈々以て茫漠となり、殆んど暗中に摸索するの感あらしむ。然れども今姑らく同教固有と見らるべき二三の主點を取て語らんに、かの婆羅門神なる者は獨一存在にして萬物の本源たり、而も之を造物主と見んか、さすれば昔時の猶太教、又はかの基督教の如く、宇宙の萬物と劃然たる區別を有する造物主にあらず、唯時ありて自らの本體より萬物を產み出す靈智者の如くも見ゆると雖も、多くは無靈の力たるに過ぎざるの觀あり。但その獨一存在なる點に至ては些の疑も容るべからず、即ち此婆羅門神のみ絕體的に存在し、他の萬物萬象は皆一時的幻影に過ぎず、其變遷轉化の窮り無き宛かも婆羅門神の夢の如きものたる也。夫れ人の個人的存在は斯の如く一時的幻影たるに過ぎざれば、賢者は宜しく此幻影たる迷妄を排棄して、深く自ら悟入する所あり、自家の婆羅門神と同一なるものあるを曉りて、茲に圓滿なる幸福に達すべきなり。凡そ此世の苦患や其源多くは此幻影と萬物の際限なき變化とより來たるものなり。且や人身の慾は諸多の罪科を生み出し、其罪科の爲めに永劫に流轉輪生して永く苦患を脫するの期なし。此變化を免かれ、此永久の苦患を脫せんには、智識を以て此世の幻影虛妄たるを悟了すると同時に必ずや兼て德行を修むるの必要ありて存す。殊に苦行難修の功を積むは慾を滅し德を立つるに於て忽せにすべからざる所と爲す。故に該教に於ける此苦行なるものは、實にその極に達し、印度內地の旅行者をして每に一見肌に粟を生ぜしむる底の慘酷奇怪なる難行を、該教の行者等は揚々得々故らに公衆環視の中に行ひつゝあるの事實は、吾人が常に彼地探檢者の紀行に聞く所なり。

かの貞操、信實、忠誠、施與等に就いては頗る見るべきの教訓を有せざるにあらずと雖も、概括して斷ずる時は、該教の基礎や至て脆弱なること爭ふべからず。伏陀(ヴェダ)に記せる言を以て宇宙に響けるものありと爲るが如きは、後世婆羅門の僧侶等が案出せる

假托の言たるや疑なし。且彼書の内容を檢するに、前後矛盾左右相牴牾せるもの尠なからず、決して一至上存在の啓示と信認するを得ざる也。一言以て該教を貫かば、曰く傲慢の教なり。看よ、僧侶の驕傲なる其教義に口を藉りて、各階級の間に越ゆべからざる深濠を隧ち、自ら高く標置して下級の族をば太甚しく輕蔑し、最下級のものを見る殆んど人類視せざるにあらずや。彼等の所謂賤民即ち輸達羅人の輩と雖も、猶人に誇るの道を求め、かの苦行を修する故らに稠人環視の中に於てし、以て人の尊敬を買はんことに汲々たるの狀、往昔のパアリゼオ徒も猶遠く及ばざるものあり。此特質のみに徴するも、該教が神授の教にあらず、吾徒の求むる眞宗教の資格あらざるは、諸君の夙に看取せる所ならん。故に余はこゝに止めて降壇せんと欲す、諸君の中若し猶該教の詳を知らんと望まるゝ者あらば、余は諸君に紹介するに『婆羅門教論』なる書を以てせん。該書は五百餘頁婆羅門教の詳細を說き盡して餘蘊なし。之を繙かば該教の性質蓋し掌に指すが如きものあらん。

第五回　佛　教

會員戊氏の壇を降るや、更に長身瘦軀の一員は壇上に立ち現はれぬ、是れ會員庚氏なり、氏は先づ卓上の玻璃鉢に水を盛り之を一嚥し、徐ろに滿場に一揖し、扨說き出して曰く、

諸君、余は戊氏の婆羅門教に次ぎ、佛教に就て所見の概要を陳べんとす。何が故に佛教の研究を婆羅門教の次に置くやと問はゞ、开は單に歷史上然かあるべき順序なるのみならず、現代に存續せる大宗教中、東洋に於ては最も熾盛なるものにして、我邦に於ても千有餘年來上下に通じて普く行はれ、從つて我思想界と我風俗習慣とに至大の關係を有すること他の宗教の比にあらざればなり。

無論現今に於ては其感化の勢力蕩然として地を拂らひ、また昔日の影を留めず、多數の識者は以て一顧を予へざるやの觀あるも、而も一方には、往々更に其面目を一新して、之を現時の進步に隨伴せしめむことを希圖する者、亦世に無きにしもあらず。されば予輩は佛教が古來傳承し來れる精髓に就て、仔細の研究を加ふるは頗る必要のことなるべきを信ずる也。

夫れ現代に存在せる宗教の秩序的研究に於て、常に吾徒の努むべき點は、之を前述せしが如く、此宗教は正に最上實在者より吾人々間に啓示せられしものなりとの印證に據て之を聢かむるに在り。此研究の方法は嘗て前回にも示せし如く、宗教なる語義より演繹し來れるものあり。蓋し此宗教の研究なるものは、かの科學或は哲學の研究等の如く、專ら人智にのみ依據すべきものにあらず。何となれば、人間と最上實在との關係及び此關係より生ずる人間の實行なる者は、人智に由りて定まるべきものにあらずして、一に最上實在者より定めらるべきものなればあり。佛教に對する吾徒が研究の地點も亦此方面より爲ざるべからざるあり。

佛教の教祖は、一瞥せる所にては、その人道と運命との教に關し、人間と最上實在との間に立てる仲保者の資格を有せるやの觀あり。然れども仔細に之を觀察すればその否らざりしを首肯せざるを得ず。釋迦が今日に至るまでかの大宗教の教祖と仰がれ來りし所以のものは、其德行と其苦業との著しかりしに基かずんばあらず。殊に渠自ら行ひ、且つ他に傳へたる道德は頗る幽遠高妙なるものたりしや疑を容れず。就中其徒弟に命ぜし禁慾主義の如きは、甚だ嚴格にして而も高尚なるもの、其教に含める慈悲忍辱の思想の如きは、確かに一理想を具へて頗る讃嘆すべきものありて存す。此教が實際に其若干の感化を一個人に及ぼし、或は苦業の範とあり、若しくは純行の規とありしは明白なる事實にして、若し人あり公平不黨の批判を佛教に加へんとせば、此二個の特點を擧げざるべからず。而も此特點を擧ぐると共に、亦其疵瑕の看過すべからざるものあるをも諼るべからざる也。

先づ釋迦は果して人間と最上實在との間に介立すべき仲保者たるか果して人類を教化する爲に、實際に天の使命を享けたるものなるか、予輩は決して其然るを信ずる能はず。渠自らも曾て之を說かざりしあり。釋迦が種々の修行を積みて、苦心慘憺一意發明せんと努めし處は、如何にせば人類の不幸、現世の無常を脫離し得べきかを索むるに在りき。渠が發明せし處は、因果の大法則平等的世界觀なりき。渠が畢生の事業は、その發明せし平等一味の教を說きて、かの婆羅門教の謬見を斥け、四種の階級制度を打破し、慈悲忍辱を以て衆生を導かんとのことありき。渠が目的とせる處斯の如く、渠

が實行を期せる處斯の如し。而も渠が任務の限られたる此範圍に於てすら、渠は決して天の使命を享けて之を爲せりとの印證を有せず、亦固より渠の哲學的見地に於ては、此る印證の有るべき理もあらざる也。然るに後世の佛敎徒は强て釋迦をして超自然的人間たらしめむと欲し、種々不可思議なる奇跡譚を附會し、釋迦の傳記は殆んど全篇此奇跡譚を以て充たさるゝに至れりと雖も、而も此種の奇跡は眞正確實なる事實なりとの外部の保證もなく、內部の理由も含有せず、否之を究むれば全く想像的附會の說たるを證すること難からず。例せば渠の母摩耶は六牙七肢の白象その右脇に入れりと夢み、渠を腹孕せり、渠は護明菩薩の下生せるなりと云ふが如き、又は渠が誕生の日、母の右脇より出で、自ら行くこと七步、右手を擧げて獅子吼し、天上天下唯我獨尊と曰へりと云ふが如き、或は死せる大象を擲て七重の塹を越えしめたりといふが如き、將た韋提希（ダイケ）の獄中より渠を禮せし時、渠は目連と阿難を從へて耆闍窟山より空中に現れ法を說きしと云ふが如き、其他神童遊戲經、涅槃經、菩提處胎經、佛本行經、普曜經等に載する處、及び印度に傳はれる、幻術を以て諸佛を現出せしこと、右眼より火を發し、左眼より水を出せしこと、黃金の梯子によりて天より降れること等の如き、此類の怪談擧げて數ふるに堪へずと雖も、何れも確固たる據證の存するなく、荒唐不稽、後人の揑造附會したるものあるや爭ふべからず。斯る假作の妄誕は決して釋迦の超自然的性質、或は其天の使命を享けたるものあるを證するに足らざるなり。之を要するに佛敎は獨り其根本に於て、天の使命を有せし者によりて立てられ、最上實在より啓示せられしものなりてふ明確なる印證即ち眞正なる宗敎の特徵を有せざるのみならず、釋迦の實際的道德律を檢すれば、其本意とせし處も決して宗敎の上にあらざりしや蔽ふべくもあらず。然りと雖も姑らく其理論を措て之を事實に徵し、此佛敎の行はれし國々の實狀を察すれば、亦宗敎の外容を有せること爭ふべからず。是れ蓋し釋迦の敎の極意とせし處は、宗敎即ち人間と最上實在との關係にあらずと雖も、後世漸くその所謂無上正覺の境に悟入し大悟徹底せんことの甚だ困難にして、到底一般世人の達し得べからざるを曉り、機根未熟の者の爲に釋迦が一時方便として說けりと傳ふる地獄極樂の如き、彌陀本願の如き或は彌勒の出現又は化身談の如き、將た福田利益の如

き假托の說のみを取り、之に加ふるに本地垂跡の說の如き、將た釋迦に對する禮拜の儀式、及び斯敎の擴まれる國々に於て、其以前より既に祀られありし神々に對する儀式傳說の如きを以てせるに由り、次第に宗敎の形を成すに至りしものなりとす。

今や吾徒は、此事實的佛敎に就て、其儀式、其敎義、其道德に關し、是非の判定を下さゞるべからざるの機に會せり。先づ其儀式に就て一言せむか、予輩以爲らく、かの佛陀に倚賴するは正に佛敎の根本的敎義に背戻せるものありと。蓋し佛敎の敎義に據れば、佛陀とは即ち不變常住絕對ある實在の謂にして、所謂萬物の本體ある眞如の別名に過ざるものなれば、從て吾人各自も眞如の性を有し、吾人と佛陀とは別物にあらず同體同性なるものと謂はざるべからず。されば之萬物皆佛性を有すと云ひ、即身即佛等の語も爲さるゝあれ。之をこれ思はずして一心一向に佛陀に倚賴すといふが如きは、實に無意義のことゝ謂はざるを得ず。況んや其儀式中には多くの迷信を含蓄するに於てをや。かの偶像に不思議の靈驗ありとし、或はかの後生車の輪轉等に効果ありとあすが如きは、此迷信の一例なり。其他誰人も知れるが如く、佛敎の或宗派が行へる多くの修法等は、概ねかの奇術師一流の欺騙手段に類するものありとす。其敎義に至ては、實際今日僧侶等の談ずる所、遐かに釋迦の本意に遠かり、概ね荒誕不稽實に哂ふに勝へたることのみなり。例せばかの彌陀本願の救世の如き、十萬億佛土の莊嚴の如き、或は八萬地獄の苦患の如き三尺の童子も首肯する處にあらざる也。

抑も佛敎の敎義として、萬有神說的世界觀より起れる無我的道德に關する僅かの原理を除けば、其佛敎特有にあらざるもの甚だ多し。例之ばかの輪廻轉生の說の如きは、之を婆羅門敎より取りしこと言を俟たずと雖も、其他尙希臘及び埃及の古代に於ても既に此說の行はれたるは、甲氏の前に言へるが如し。天堂と云ひ地獄といふもの、亦歐洲及び亞細亞に於ける他の諸宗敎にも認めらるゝ所あり。只佛敎の特有ある點としては、之を飾るに種々の想像を以てせしと云ふに通ぎず。畢竟するに佛敎の敎義なるものは。其理論的方面に於ては、換言すれば哲學としては頗る幽遠高妙ある談議の存するもの在りと雖も、其實行に關する方面、即ち宗敎としては、多くの忘想を含み、而も其特有なる者は至て僅少なりと謂はざるべかちず。尤道德に關する點に就ては、か

の佛遺教經等に載する處の如き、頗る感嘆に値すべきものあるは否むべからず。是れ釋迦の首唱せる主要の部分に屬し、佛教特有の所點なるべしと雖も、而も其主要なる禁慾と慈悲に關してすら、猶議すべきものありて存する也。夫れ釋迦の所謂禁慾なるものは、全く消極的誡律に屬するものとす。其禁慾の目的とする所、畢竟人生の不幸を遁がれ、現世の無常を脱するにあり、即ち消極的目的と謂ふべきものなれば、從て此目的を達する方道たる處の禁慾も消極的たるべきこと自然の數なり。然り而して渠の教へし所は、一切の慾を滅ぼさむとするに在れば。從て一切の活動力を滅盡せしめむと欲せること言を俟たず。惟ふに禁慾なるものは、或方面より觀る時は、善德を修めんが爲に、其の障碍とあるべき私慾を抑ふるの盡力にして、即ち公共の利益のために自家の身を犧牲に供するの謂なれば、其善事たるや疑ふべからず。蓋し已れに克ち、己れを犧牲として、始めて善德を行ひ得べく、善德ありて始めて他人を益するを得べし。禁慾は此善德を修め他人を益するの第一歩ありと謂ふを得ん。然りと雖も、佛教に於ける禁慾の目的は、既に上にも言へるが如く、只自家の苦痛を脱れ、不幸を避けむ爲めのみにして、從て卑しき私慾を抑へ、高尚なる精神的活動を熾盛ならしめむとするにあらず。反て一切の活動力を絶滅し、宛も死者の如くあらしむるに在れば、之を以て道德的善行なりとあすは、予輩の大に躊躇する處あり。斯く言はゞ或は異議を唱へて曰ふものあらん、汝の言ふ所は、所謂有餘の涅槃乃至無餘の涅槃に住する者の見あり、有餘無餘の涅槃は寂滅を以て樂しみとなす、然れども是未だ佛教の極意に達した る者にあらず、佛教の極意は所謂無住處涅槃に在り、無住處涅槃は讀んで字の如く、生死の二境に住する無く、大悟徹底して大自在を得るの謂なり。既に此境に到れば誡もあく律もあし、而も心の適く處に從て則を超えず、而して自ら解脱得道せるを以て足れりとせず、油然として慈悲の心湧き起り、奮て衆生濟度に膺り、活潑々地の活動を爲す。佛も謂はずや、生死に輪廻し三世に流轉するは智者の欲せざる所、然れども衆生濟度の爲には余幾回の生死あるも猶辭せざる也と。以て佛教の極意の汝が言ふ如きものにあらざるを知るべしと。佛家の所謂大乘の所説として余も言説の上に之あるを知る、事實として二三者の事蹟に之を見る、然れども其多くは之を口舌の間に弄する

のみ、其實行に徴すれば大乘とおく小乘とおく、均しく厭世教たるの實を示す。上下悠々三千載彼等が所謂無住處涅槃に達せる者殆んど之を見得べからざるは、余をして前説の見解を抛棄せしむるに足らざる也。

今假りに百歩を讓りて禁慾は大悟の境に到るの道とおし、此境に到れば躍如として大慈悲心の活動を見るとするも、其所謂慈悲なる者如何を問はざるべからず。釋迦の所説の慈悲なる者は、衆生即ち萬物に對して博愛の意を體すべしとの誡律にして頗る感嘆すべきものなりと雖も、而も猶道理に悖れる所おきにあらず、且人に活動力を與ふべしとは信ぜられざるおり。看よかの五戒の一たる殺生戒の如きは、その道理の範圍を逸せるものたるや蓋し何人も首肯する處おるべし。此戒律や固とかの慈悲博愛の意を敷演せるものたること言を要せず、此戒律に從へば禽獸蟲魚如何なる微細の生物と雖も苟も之を殺すを許さず、此の如きは天の故らに吾人に賦與せる食料の大部分を奪ふものと謂つべく、到底實行の期し得らるべきものに非ざるなり。彼等の處説に反して其活動力を人に與へずと余の斷言せるものは、之を佛教史に徴すれば蓋し思半に過ぐるものあらむ。看よ、佛教の傳播せる國に於て、今日こそ種種の刺激に逼られ他教の翠に倣ひて多少之を見ると雖も、該教自らの力によりて何れの地にか施療院、孤兒院、慈惠院等の如き慈善的博愛的事業の經營せられたるものあるや。かの施與の如きも其教律により所謂布施と稱して只自教の修行者に向て爲さるるのみ、他に對しては殆んど言ふに足るの實を見ず。去れば『其果實に據て其樹木を判す』てふ諺にして、果して誤おきものあらしめば、佛教の所謂慈悲おるものも、其の頗る重ずべきの説あるに拘はらず、其の功果に至ては殆んど皆無なるものと云ふべく、此功果おき教義は亦力なきものおりと謂ふを得べきおり。尚一歩を進めて佛教の及ぼせる道德的感化の如何を檢せんか。或個人に就ては之が爲めに其素行正しく、其心情純潔おるものたらしめしことあるは、決して異議の挾むべきおしと雖も、而も盛んに佛教の行はれたる社會に於て、其好結果の見るべきもの甚だ尠きも亦蔽ふべからざる事實おり。試に看よ、佛教の最も盛大を極むと稱せらるゝ西藏の如きは、一妻多夫の弊風盛んに行はれ、其他の東洋諸國に於ても、一夫多妻の惡俗、或は離婚の惡弊等遂に壓滅せられた

ることなきにあらずや。約言せば佛教に依りて道德の改善を促したる蹟、頗る見易からずとす。

以上に開陳せる處に見れば、佛教なるものは吾徒の須らく求むべき眞正なる宗教の印證、或は徽號を有するものにあらず。輓今人智の進歩によりて此佛教々義の空漠にして、其根據の微弱なることは漸く世の識者の看破せる處となりしが如し。故に今日尙も有識の士と呼ばれむ者は、此佛教を維持せんが爲には、之に根本的大改革を加ふるの要ありてふ議に贊成す。此改革の綱領に於て單に佛教と云ふ名稱のみを存するは其常となすものゝ如し。勿論彼等は新宗教を創立するの意にはあらず、必ずや佛教中の三四の原理を抽出し、之を提唱し之を敷演せんとするものなりと雖も、其唱說せる處を見れば、舊佛教より抽出し來れる原理も、其の意義大に舊佛教と趣を異にせるの觀あり。要するに彼等は舊佛教の骨を取りて、之に新學說の皮肉を着け、以て新佛教なる形骸を具へしめんと力むるものなり。縱令その形骸にして成り得るも、その生命をば如何にして與へんか。此の如きは畢竟根本より新宗教を立てんとする者なりと謂ひ得べく、この新宗教を立つるの一事は、到底人力の企て及ぶべき所にあらざるは、我會長の嘗て斷言せし處の如し。されば此種の盡力は其の結局として哲學的或は倫理的主義を設定するに止まり、到底其志せる宗教に就ては得る處なくして止むべきあり。余輩は信ず、彼等新佛教の首唱者の多くは皆唯物論に私淑せる者なれば、その教理に於ても其道德上に於ても全然失敗に歸し了るべきものなるを。此故に將來の宗教は新佛教の興隆に待つべきものにあらざるを、余輩は玆に斷々乎として明言するに憚らず

第六回　奇蹟論

草木黃落し飛鴈南に歸る晩秋の頃、我研究會の第三回は開かれぬ、當日第一に壇に起てるは會員甲氏、その說ける處は奇蹟論と題して大要左の如きものなりき。曰く、

古來幾千年東亞の天地に瀰蔓して幾億の民心に浸潤し、多少の宗教的感化を予へ來りしかの佛教も、吾徒が眞摯なる研究の下には、遂に眞正なる宗教の特質を有するものにあらずと判定せられしこと正に前回戊氏の反覆論明せし處の如し。去れば吾徒は更に

探究の歩を轉じて、爰にかの基督教に就き斯る宗教的特質の存するや否やを究めむと欲す。今之が研究を試むるに先だち該教が常に其眞正を證せむが爲に提出する奇蹟なるものに就て、須らく豫め研究を經べきことは吾徒の正に採るべき順序ありと信ずる也。

惟ふに基督教が其の眞正を證せむが爲に、奇蹟なるものを提出するは頗る理に合ひしことにして、又吾徒が豫て採り來れる方針に適へるもの也。何となれば宗教ある者はその本質として人間と、最上實在との關係あらざるべからざること、既に前回に於て我會長の論定せしが如く、而してかの科學と云ひ哲學といひ共に此最上實在に就いて、少しも殘る處あく精密的確に其の眞否を證明し能ふの資にあらず、從つて斯々の宗教は眞正ある宗教にして、謬あく人間と最上實在との關係を說示するものありとの證明は、必ずや之を最上實在より直接に與へらるゝ處のものに待たざるべからざること、同じく前に既に論定せられたる處の如くあればあり。

夫れ最上實在より此る證明の與へられざる前に於ては、此最上實在と人間との確たる關係の知られざるのみあらず、此最上實在其ものに就ても同じく明確に知るを得ず。言ひ換ふれば、この最上實在が眞正ある宗教を示し、以て自已を現はすの前は、人智は之を推測して、蓋し斯くあるべしと想像するに止まる也。尙別語を以て之を言へば、人の思想は此最上實在に就て、或は自然的勢力に超絕せるもの、特に萬物の本原なる者、蓋し存在するあらんとの推測に止まり、決して明確に之を認め得ず、この萬物の本原なる最上實在が自已と人間との關係を示すと共に、自已を現はすに至り、始めて之に就て十分なる確信を得能ふあり。さらば如何にし彼れ最上實在は自已を現はし且眞正なる宗教を示すかと云ふに、萬物の本原にして又自然の勢力に超絕せる渠は、必ずや亦自然的勢力に超絕せる所業を以て示すべきや勿論なり。

此の如き現象ありて始めて天地の萬物と宇宙の勢力とに超絕せる神の印璽と認め得べく、この印璽ありて始めて眞正無謬の宗教ありと承認し得べき也。然れば則ち若し世に印璽を有する宗教、即ち其の證據として獨り神にのみ皈すべき現象に基ける宗教あるものあらば、誰人も此宗教の神より出でしものにして、之を立てたる者は必ずや天

の使命を受け、最上實在即ち神と人間との仲保者たるべき者ありと首肯せざるを得ざるべし。

抑もかの宇宙に存在せる自然的勢力に超越せる現象、別言せば則ち萬物の勢力に勝れる所の神に皈すべき現象は、吾人が呼んで奇蹟とあすもの即ち是なり。蓋し如何なる宗教にても、その確かに天授のものなるを未だ信ぜられざるの前には、一に此奇蹟に據て其天授神立のものあるを證せんと努めざるはなし。然れば吾徒はかの基督教が眞の奇蹟に據て天授神立のものあるを證明せらるゝや否やを究むるの前、先づ此奇蹟あるものに就て一考を費さゞるべからず。故如何にと云ふに之につきて世の論議を惹起せしこと蓋し一再にして止まらざればなり。或者は曰ふ奇蹟は絶對的不能のことなりと。又或者は曰ふ、奇蹟は不能のことありと云ひ難し、然れども實際に於ては如何ある事實を以て奇蹟となすべきや、是れ到底判知すべからずと。ア、果して奇蹟は絶對的不能のことなる乎、果して之を實際に稽査明究すること能はざる乎。

前掲の定義に據る時は、奇蹟ある者は自然界一切の勢力に超越せる現象なり。詳言せば或る一定の場合に於てかの自然界の現象を生ずる原則を中止して、之に反する現象を生せしむるの謂あり。例せば夫の河流は重力の原則に從ひ常に低きに就くものなれども、其河床に何の變更せる處もあらずして、一朝水の逆流することあれば是れ重力の原則の中止せられたるなり。又人の既に死して其屍骸の腐爛せるに及び。忽然蘇生することあれば是亦自然的原則の同じく中止せられたるものありとす。此の如き現象は只宇宙一切の勢力に超絶せるもの丶力のみ能くし得べきもの也。爰に吾徒の究むべき問題は、此る不可思議なる現象の果して生じ得べきものありや否やといふに在り。若し形而上界に至上者の實在するありて、此者萬物の造者たり自然的法則の設定者ならんには（科學は有形界の現象を研究するに止まるものあれば、此形而上界の問題に容喙するの權利なし）斯る不可思議の現象の生じ得べきや否やの問題、言ひ替ふれば即ち神の全能力に由りて斯く宇宙の一原則は其適用を中止せらるべきや否やの問題は、其の解決毫も難きものには非るべし。蓋し神が此原則の設定者たらば或場合に於て其の適用を中止すること自由たるべく、宇宙の勢力を創造せしものたる以上は之に制限

を加ふること亦隨意あらざるべからず。且つ自然界の勢力に倚頼せず、自から欲する儘に左右し得べきこと言を俟たず。

或者は又此奇蹟の可能に異議を挾んで曰く、此宇宙の原則は全く必然あるものにして、吾人の觀察する處に據れば、或場合に於て必然に之に伴ふ或現象の生ずるは常に一定不變なり。かの必然の秩序に於て未だ曾て例外あるものあることあるし。故に奇蹟は到底有り得べきものにあらずと。然り實際にかの定められたる原則の自然の因果に從て自然に又不變に一定の現象の生起するは實に論者の言の如し。然れども試に問はむ、如何にして神は此自然に拘束せらるゝや、如何にして或場合に於てかの原則の適用を中止する爲め自然界に干渉し能はざるや。看よかの機關師なる者を、渠は或機會に於て自然に生じ來るべき現象或は結果の或者を能く豫め防止し得るにあらずや。而も人間は其機械を全然意の儘に處理し得るものにあらず、その機械の從へる原則は悉く機關師の力にのみ屬せるものにはあらざるあり。之に反して神は自らその原則を創定し、その創定せられたる原則は全く神の力に依屬すべきものたるなり、神豈之を左右し得

ざらんや。

此時場の一隅に突如起立する者あり、辯士質問と呼び聲で曰く、

予は信ず、一切の現象は宇宙に於て相互に極めて密接の關係あるものあれば、若し或場合に於て一現象の通則を中止せば、恐らくは宇宙の秩序を破るの結果に至るべし、故に決して奇蹟の可能を首肯し能はずと。

辯士甲氏は輙ち之に答て論ずらく、

自然界に於ける一般の現象が、自然に不變なる原則に支配せられて相互に連絡せるは余も亦肯諾する處なり。然れども神が宇宙の現象に干與して一の原則の適用を暫く中止することあればとて、それが爲に宇宙の秩序の全く破らるゝとは認るを得ず。見よ、吾人が日々の動作を、吾人はその自由を以て時々この宇宙の現象に干渉し、或は一時之を中止し或は更に新現象を生せしむるにあらずや、而も之が爲に宇宙の秩序は曾て破らることあらざる也。

問者猶屈せず、更に問を起して曰く、

果して辯士の說の如く、神が隨意に斯々の現象を中止し能ふべくむば、將來起るべき現象を豫測することは全く不能とあり了り、從て科學上の推理なるものは擧て無効と謂はざるべからず、是れ豈予輩の承認し得べき處あらむやと。

辯士は言下に左の答辯を與へて曰く、

夫れ然り、豈夫れ然らむや、神の自然界に干涉するは實に稀有なることに屬す。而してその干涉の稀なる丈け、それ丈け深く吾人の注意を惹くものありとす。この神の稀有なる干涉に由て宇宙の秩序の亂さるゝが如きは決して有るべき所にあらず。何とあれば或場合に於てその適用を中止せられたる原則は、その一時の適用中止に拘はらず、依然留存すべきものにして、此原則と他の原則との關係も共に留存すべき理あればあり。故に此原則に依據する科學の推理は決して無効に歸するが如き虞あきや瞭かなり。論者又或は曰はむ、何が故に神は一たび此原則を設定しながら、後に至りて時に之を中止することあるや、是れ自家撞着の擧措を敢てし前後矛盾の所作を演ずるものに非ずやと。答ふ、否決して然らず、神は固より此原則を創立するに方りて、時に或は之が適用を暫く中止することあらむと豫定するを得たるなり。且つ之を中止する處以は、以て吾人の注意を喚起し、吾人の矇を啓らき、將た自家の全能を彰はさむ爲め、又はその宗敎の眞正を證せんが爲め、即ち既に前述せしが如く、其宗敎に自家の印璽を押捺して、此宗敎の建設者の天の使命を受けたる者なるを證明せむが爲めなりとす。されば奇蹟は單に出來得べきものと云ふに止らず、必ずや世に實現せらるべきものたる也。如何とあれば宗敎の眞正を證せむ爲め、即ち其敎の眞に神より出でしものなるを示さむ爲め、之を措て他に取るべき方法あらざればあり。

今や吾徒は進んで第二の異論に對し、奇蹟は果してその事實を檢證し得ざるや否やの問題を究めざるべからず。此問題は分ちて二となるを得、即ち（第一）奇蹟的事實は只事實として檢し能ふや否、（第二）該事實は眞に奇蹟的事實ありや否、詳言せば該事實は自然界の勢力によりて生せるにあらず、必ず神の所業と謂はざるべからざるか、是なり。第一問は之を解決すること難からず。奇蹟的事實は事實として他の事實の如く、吾人の五感に觸るゝものあり。例を死者の復活に假らむか、此人の實に既に死せ

るものあるか否を檢するは毫も困難の業にあらず。其屍骸の既に腐爛し始め、臭氣鼻を衝くに至れること、將た一旦空氣の流通せざる狹き棺中に藏められ、地下數尺の墓中に埋められ在りしことは、容易に實驗し得べき所、此屍骸の既に秋毫も生氣を存せざることも亦萬人の齊しく首肯する所而して此人が再び生氣を獲て、歩行し言語し日常の務を爲せりと云ふことも亦實驗するに難からず。猶一例を先天的盲者に取らむか、渠が生れて以來曾て何ものをも視るを得ざりし事實と、又その奇蹟に與りし後ち、能く物を視覺し得し事實とは、共に容易に實驗し得べきものあり。去れば奇蹟的事實は他の事實と異ることなく、若しも確かに覺知せられたりてふ保證あらば、之を拒むは理の容れざる處なり。第二問の奇蹟的事實が果して奇蹟あるや否やを檢するには、只宇宙の自然の秩序に異りて、常に此場合に行はるべき原則は中止せられたりと云ふことを認むれば足る。之を認むるには敢て深遠なる智識を要せず、蓋し誰人も靡爛せる屍体の偶然に蘇生し活動するが如きことなく、又先天的盲者が些の治療をも加へずして忽焉明を得るが如きことなきは熟知する處なればなり。斯く論じ來れば或は難じて言ふものあらむ、論者の言の如く、或場合に於て奇蹟なるものありと斷言せむ爲めには先づ此奇蹟と呼ぶべき現象が實に一切の自然的原則以外に生じ、斷じて或る未知の原因より生せし結果にあらざるを洞知するの要あり。故に奇蹟あるものありと斷ずるには、先づ一切の原則を知悉せざる可らず。然れども誰か一切の原則を知悉せんや、されば世に所謂奇蹟あるもの果して眞に奇蹟ありとは吾人の斷定し能はざる所あらずやと。是れ一應理あるが如く聞ゆと雖も、其實大に否らず。或一定の場合に於て奇蹟ありと斷ずるに、一切の原則を知るの要はあらざるなり。何となればかの自然界の原則なるものは一定不變にして、或る一定せる場合には此一定不變の原則によりて、古往今來同一の現象を生ずべきものなればなり。然るに此同一場合の下に此一定せる普通の現象は生せずして、却て之に反する現象の起るあれば、此一定せる場合に於て、慥かに之に適用せらるべき原則は中止せられ、茲に起りし現象は明かに奇蹟ありと斷言して過ちなかるべきなり。故に奇蹟は其實際に於て正さにその奇蹟的特質に見て容易に檢覈し得べきものありとす。勿論或事實を取て之を奇蹟なりと斷ずるには、先づ能

く細心注意して其事實を探究し、其場合と四圍の事情とを精査して、然る後ち果して事實は眞實なり、現象は明かに自然界の普通原則に悖るものなりてふことを認めざるべからず。此の如くにして斷定を下せるものを猶奇蹟ならずと抗辯せば、汗は唯沒理頑迷の所爲と謂ふべきのみ、決して理に循ふものとは謂ふを得ず。

此時復たび場の一隅に質問の聲起り蓬頭苔顏の一青年徐ろに起立して質して曰く、

奇蹟の有り得べきこと、又事實上奇蹟として之を檢し得べきことは、既に貴說により て命を聞けり。然れども予は思惟す、實際吾人の親しく實驗せざる奇蹟、即ち古代より傳唱し來られたるものに就ては、頗る信を置き難きものありと、如何。

辯士聽き擧りて之に答て曰く、

貴意正に了せり、已に前にも言へるが如く、奇蹟的事實は他の事實と同じものなれば、その昔時に行はれたるものに至りても、之を他の歷史的事實と均しく判定せざるべからず。即ち史學的批評の原則を之に應用するを要す。而して此る事實の立證者が精確に之を觀察せること、且つ渠の他人を欺騙せざること、及びその證據は誠實に傳來したりてふことに就て、明瞭的確なる證明を得ば、この奇蹟的事實も他の歷史的事實と一般、焉んぞ之を信認せざるの理あらんや。

第七回　基督教

（第壹）　基督教の神性を論ず

甲氏壇を降る、次で登壇せるは會員丁氏、その演述せる處は曰く、

前席に於て我會員甲氏は奇蹟に就て論ずる處ありき。蓋し奇蹟論なる者はかの基督教の神性に關する、別言すれば基督教の天授神立の宗教なる所以を證明する緒言たるに過ぎざる者なり。余は甲氏と偕に宗教問題に於ける此方面の研究を分擔せし者なれば、茲に諸君に向てかの基督教の神性、即ち該教は果して天より出で神より來りしものなりや否やに關し、その研究の結果を報ずる所あらんとす。今先づ余の豫め自白し置くべきは、曩に會員甲氏と共に、特に基督教の研鑽を任せられし當時、余の該教に對せし感想は今や全く一變して其趣を異にせることありとす。諸君も亦今より余の陳ぶる處を聽かば、少くとも該教に對し從來把持し來れる感想の當を得ざりしを曉とり、公

平に且つ可能的深く研鑽し試みんとの思念を發せらるゝことあるべし、果して然らば余の喜も亦太甚し。

余思ふに恐らく諸君の中にも、かの基督に就て、又渠の敎に就て、余の數個月前猶未だ該敎の研究に指を染めざる當時に懷抱せし感想と同じ感想を有せらるゝ者あるべし。當時余は以爲らく、渠耶蘇なる者は唯かの釋迦或は孔子の如く一の偉人若くは聖人たるに止まり、其の睿智によりて人類の爲に新たなる道を開き、其の德行によりて名聲を博し、遂に社會にその思想を普及せしむるに及びしのみ。概言すれば該宗敎は渠の經驗と渠の思想の作用とによりて產み出だされたる結果に過ぎずと。然るに研究の結果は豫想の外に出で、意外の歸結に到達し、今や全く前の思想を拋擲せざるべからざるに至りぬ。仍て玆に如何なる經路によりて余の思想は斯く變遷し來りしやを畧說し、以て諸君がこの高尙深遠なる敎義を研究するの參考に資する處あらむと欲す。」

抑も吾徒同志の此研究に於て、先づ第一に余の强き注意を惹きしものは、古來基督敎の諸派が（現に無信に傾きつゝ在る宗派を除きて）齊しく基督の神なることを信じ、その敎義として渠の言行に據て渠は實に神より遣はされ、且つ自ら神なりと呼びしを證するに在りき。即ち該敎の敎義によれば、基督自ら神なりと稱し、之を證するに奇蹟、即ち會員甲氏が前席に於て說明せし如く、唯全能なる神獨り能し得べき所業を以て爲せりと云ふ。されば余の解說すべき問題は、基督は眞に自ら神ありしか、且つ實に神の所業を以て之を證せしかの二點にあり。此問題は吾徒の企てし此研究會の綱領に適合せるものありと信ず、如何となれば曾て屢々論ぜられし如く、吾徒の索めむと欲する處は、一に至上存在者所謂神より出でし宗敎、即ち神の自ら我が敎ありとの確證を與ふる宗敎のみに在ればなり。余は基督敎を研究するに方りて、圖らずも該敎が此特徵を有し此左券を有するを發見し、窃かに歡喜の情に堪へざりき。而して余が此研究の方針とせし處は、該敎の諸派が各々主張する敎義敎條にのみ據るを以て足れりとせず、該敎の起源にまで遡り、該敎の記錄を經とし當時の史書を緯とし、精細詳密確乎たる索究を遂げんとするに在りき。是れ該敎の敎義は當初果して天より出でしものなるか、眞に人間と最上實在者との關繫を示すものなるかを究むるには、この

道を措て他に恰好あるものあしと信じたれば也。余は自家の經驗に徵して、基督教に對する斯る根本的研究は、かの佛教等に比し幾倍の容易あるを見る。蓋しかの釋迦氏が佛教を創搊せし時代は、殆んど史的批評の遡り得ざる古代に在り、加之渠が生活せし印度なる國は史的紀錄の至て匱しき國にして、かの大戰書等僅かに二三を除けば全くその時代を徵するに詮なく、從て佛教の起源は宛も朦々たる煙霧を隔てゝ遠き山巔を望むが如くありと雖も、基督教は之に反してその世に現はれしやかの羅馬皇帝該撒が地中海岸の國々を征服し、之を統御せし時代にして、此羅馬政府の下に今日猶その雷名を聽しつゝ在る哲學者雄辯家詩人美術家等の輩出を促せし文物旺盛の比ありき。故に基督の現はれし時、其の教の始めて宣布せられし時代は、正確ある歷史的時代なり。且やこの時代に就ては史的批評家が精探細究秋毫の末までも猶剩さゝらむことを期し、其結果この時代に於ける出來事は細とあく大とあく其明瞭ある之を掌に指すが如し。尤も基督が最初その教を傳へ、又其教を親しく聽ける證據人所謂使徒ある者等が、之を宣布し始めし當時にありては、之を書に筆し之を記錄に貽したるにはあらず。

基督と其の教義に關する記錄あるものは、渠の系譜と渠の言行渠の教訓とを記せる四福音を始めとし、使徒行傳、その他使徒の書翰、及び第一世紀の末葉と第二世紀の初葉とに於ける聖會內外の博士等が記述せる者を以て嚆矢とす。而して或一派の批評家中この四福音の起源を難じて、此等の書は基督に親炙せる弟子等の手に成りしものにあらず、後世他の信徒等が名を彼等に托して僞作せるものなりと稱せり。此說の根據たるや古來の傳說を斥けて、單に同書の用語が使徒時代のものにあらざるべしとの考證に基きしものあれば、固より有力ある評說とは云ひ難し。去れば一時世に行はれざるにあらざりしも、後ちに一層精確ある研究の結果遂にその成立すべからざるものあるを認められ、今日この說を墨守するものは殆んど皆無あるの姿あり。斯は兎に角余は爰に此說の當否を深く糺すの要を見ず、此る詮議は徒らに冗長に陷るのみに止まらず、余の目的とする處に深く關係するものにあらざればあり。只こゝに一言注意すべきは、第一世紀の末葉と第二世紀の初葉に成りし該教著述家の書中には、かの福音書中の事實或は其章句までも引用しあり、當時一般に此教は使徒より傳承せるものあり

と信ぜられ、信徒の會せる所には此福音と使徒保羅（ポーロ）の書簡の讀まれたりてふ證跡の徴すべきものある是あり。此他尚注意すべきの點は、使徒の敎を親しく聽ける弟子等の猶多く生存せし當時に於て、既にこの福音の書ある者は諸處の國々、即ち小亞細亞阿非利加北部の諸邦、希臘伊太利その他の地方に於ける敎會に傳はり、夙に信徒の手に入り居りしこと、而して此に記載しある敎訓は使徒の傳へし者ありと寸毫の疑議もなく承認せられたること、又當初活版の發明なかりしが故に斯く諸方に散在せる福音は、皆寫字生の手に成りたるものに係る、而も現に存在せるその寫本幾百種、之を對照するに皆相互に符合して、其の趣意毫も異るおきこと、假令謄寫上避くべからざる過失に由て一字一句の僅小おる誤寫ありしにもせよ、その敎義に至ては毫も損益せられたるが如き痕おかりしは眞に一奇とも謂ふべきこと。該敎以外の著述家、例せば第二世紀の比はひ飽迄基督敎を攻擊せし彼のセルシウスの如きも、此記錄が眞に使徒の手に出でしは秋毫も疑ふ處あらず、否啻に疑はざりしのみならず、却て此記錄に據りて他方面より攻擊を努めたりしこと等なりとす。故に今最も嚴正おる批評的研究をおす者の爲に、最も明亮的確おる典據を求めば、此初世代の記錄に及ぶものおし。此記錄は基督の系譜、渠の言行、渠の敎訓等當初使徒等の傳へたりし儘に、今日到處の國々に維持せらる。嘗て使徒の名を冒して僞福音なるもの〻世に出でしことあり、此書頗る敬虔の語句に富み極めて巧妙なるものなりしと雖も、聖會は遂に之を斥けて採用せざりき。此等の事實に徵するに、明かに使徒より傳承せしものにあらざれば聖會は決して之を承認せず、即ち使徒に親炙して其口より聽ける人々の數多かりし故を以て、此る僞書はその僞書おるを明かに判定せられ遂に排斥せられたるを見るべきあり。斯く推究し來れば吾徒が此福音に對して最も嚴正なる批評を加ふるに剩す所は、唯該書に記載せる基督の系譜、渠の言行、渠の敎義の證明者たり宣傳者たる彼等使徒の立證には、如何なる價値をか有するを問ふの一事あるのみ。今やこれに關して余の見る處を開陳せん。

先づ使徒が其師基督のことを傳ふるや多少裝飾を加えし跡おるか、否彼等が忠實に正直に之を爲せしは縱令該敎の敎敵と雖も曾て此點に疑を容れしことおきを以て徴すべ

く、使徒等の記錄せし事跡に見、彼等の宣敎せる場合に考ふれば彼等が世人を欺騙し得ざりしは彰々乎として瞭あり。かの福音書に據れば使徒等の人と爲りや躍如として目睹るの感あり、彼等が猶基督の左右に侍せし日に、彼等の慮かりし所は一に自家の利益にあり、當初彼等は以爲らく、軈て師耶蘇が其言の如く王國を建設するに至りなば、己れ等は其大臣宰相たるの榮を荷はんと。然るに一朝基督の捕へられて死刑に處せらるゝを見るや、皆遁逃して禍殃の自家に及ばんことを畏れ、深く匿れて出でざりしにあらずや、是に由りて觀れば彼等の人と爲りや魯鈍怯懦寸毫の權謀術數なく、世を欺かんと企るが如き大膽不敵の志望あかりしを知るに足る。然るに其後ち幾程もなく彼等が其師の遺訓を世に宣傳せんと蹶起せるや、奮然として其の前に横はれる千難萬難を排し、危難の其身に及ぶをも顧みず、其の師の嫌惡を受け刑死せられしイエルザレムの中央に立て、公々然その師の敎を唱說し、飢餓困厄の踵到するにも拘はらず、猶太以外の國々に出でゝ卑猥極まれる世人の慾情を責め、墮落頂點に達せる當時の風俗に抗し、又その民の信奉せる邪神の拜禮を排斥し、時に苦杖の下に立ち、時に鐵窓の裏に繫がれ、或は水火の窘迫を蒙りしと雖も其の勇氣曾て衰へず、遂に其宣傳する處を證せん爲め、血を流し命を拋つて死に至るまで口その師基督の敎を說くを絕たざりしもの、深く其心に該敎の天授神立あるを信ずるにあらずして、奚んぞ寸毫も身に益する所あらず、否身命を犧牲に供して徒らに世を欺くが如き狂愚の所爲を敢てせんや。實に斯る證人の證言は欺騙の片影をも認むる能はず、或る識者の「事の眞實を證せん爲め最も有力ある立證は其身を殺して辭せざるに如くはあし」と謂へるもの豈是あるあからんや。

以上彼等使徒が世を欺くの意あかりしは略その說を盡せりと信ず、然れども猶茲に一の疑問の存するあり。开は彼等使徒が不知不識の間に過誤を混じて宣傳せしことあらざりしか是あり。這は實に想像するだも猶能はず、盡し一たびかの福音を繕ける者は、彼等使徒が何事を信ずるにも甚だ踟躕の狀ありしを屢々認め得ん。且や彼等が身の危難を顧みず其の生命を拋つて辭せざるの決意をあせるもの、豈明亮正確寸毫の疑も容れざる底の顯著ある事實に由らざるを得んや。況んや基督の言行は靑天白日の下群衆

環視の前に公々然明々地に發表せられしものにして、其事實の糺し易き、而して此言行を親しく睹聞せし証人も猶太の到處に數多ありしに於てをや。若し使徒等の說く處に一點の過誤だもありたらんには、彼の親しく睹聞せし人々は直ちには之を拒否すべかりし筈なり、然るに渠基督の仇敵すら、渠の行爲を見て之を拒めることなく、唯惡魔の力に藉りて之を爲せるものなりと言ひたる所を見れば、使徒の証言は最も正實的確なるものなりしを知るに足る。此他猶彼等が傳へし基督の所業が不可思議なりしとて當時誰人も之を拒否せし者あらず、かの敎敵セルシウスの如きも遂に之を拒否し得ず、單に魔術に口を藉りて攻擊を逞うせり。猶太の史家ヨゼフなる者は該敎の信者にあらざりしかど、その著の史書に、「此時代に大聖人耶蘇なる者あり、不可思議なる所業をなしぬ云々」の語をなせり。猶太敎の口碑と敎訓とを記せる「タルミユド」と云へる書にも、同じく耶蘇の不思議なる所業によりて同敎徒を誘惑せりとの言を載す。此の如く當時の事蹟を博く探究し深く研鑽する時は、愈々倍々使徒の立証の正確無謬なるを明かに証し得るなり。斯く使徒の立証に價値あり力ありたればこそ、僅々數十の星霜を經るに過ぎずして、該敎の信徒は著しく增加し來り、第二世紀の末葉には既に帝國の到處に該敎を奉ぜる官吏をすら見るに至りしなれ。此信徒等は深く强く使徒の證言に信を置き、殆んど三世紀の間絕えず虐待され窘迫され、幾萬の人命は其信仰を證明せん爲めに失はるゝをも忍びたり。玆に至て余は謂らく、世に史ありて以來未だ曾て此の如く强力なる事蹟あるを見ずと。仍て余は從來該敎に就て懷抱せし感想の誤謬を覺り、全く思想の轉化を來たし、該敎の立證者が證明せるものを確信し、基督の敎とその行爲とは聖書の傳ふるが儘に信受し、心窃かに敬虔の情に充たされ、一道の靈光が余の心を照らして過ちなからしめむことを默禱し、此研究によりて嘗て望める眞理に到達せんことを期したりき。

若し余輩が以上に反覆論證せし如く、基督と其の敎、及びその生活中の所業に就いて使徒等の語れる訓言は、かの福音書中に含有せられ、且かの使徒等の性質彼れが如く、その生涯に受けし辛酸彼れが如く、遂には血を灑ぎて其敎ふる處を證明し、尙且つその證明は史的批評の精微を盡し、既に毫釐の疑議をも挾むべき餘地なき底の正確なる

ものありとせば、今や吾徒の力むべき所は、かの新約聖書を繙て、基督に就て何を記載しあるやを見、彼れ基督は果して神より遣はされしものなるか、且つそれに關して渠は眞正確實なる證據を示せしかを討究するに在り。余輩が討究の結果に據れば、渠基督は自ら其身の神より遣はされしを主張し、且つ之を證せんと欲せしもの丶如し。以下余輩が之に關して詳述せんと欲する次序とその要目とを擧ぐれば、先づ基督が其天の使命を宣べし若干の語句を引用し、而して渠が其の處業を以て其の言へる處を證明せしを述べ、次で此語句と此所業とを批評し、基督が自ら神の子と稱せしは他人を欺けるものなるか否、及び之を證明せんとせし證據は眞正確實なるものなるか否、是なり。

抑も基督がその天の使命に就いて言明せし處を悉く玆に列擧せんは、蓋し無用の業なるべし。去れば余は唯その最も明確なる若干の語句を引用するに止めんとす。先づ約翰(ヨハネ)著福音書を繙かむか、その五章三十七節に、渠が明かに猶太人に向つて「我を遣はしたまへる父は自ら我が爲に證を作せり」と言へるを見む。こゝに父と云へるは少しく福音に通せる者の齊しく首肯し得るが如く、神を指して言へるの語なり。渠は啻に自ら神に遣はされしと言へるのみならず、進んで自ら「神の獨子」ありとさへ語りたり。同じく約翰三章十六節に「抑も神は世〔の人〕を愛するや厥の獨生子(ひとりご)をさへに與へたまふ程にして、凡て彼を信ずる者に沈淪(ほろ)びずして、却て永生を得せしめんとしたまふなり」と云ひしは之が一證なり。尙他所に渠は自ら人々に永生を與ふるを語りて曰く、「我れ永生を彼等に與ふ」(同書十章廿八節)、又「我と父とは一なり」(同上三十節)と言ひ、以て自ら神たる性質を有するを猶太人に示さんとせりき。猶太人は之を聞くや石を取て渠を擊たんと擬せり、渠乃ち何が故に余に石擊たんとするかと問へば、猶太人は之に答へて、「汝は單に人なるに自ら神と稱するに因りてなり」と、渠基督は此語を聞て、猶太人を以て誤解せりと爲さず、又自ら神にあらずと一言も辨解せず、只「我若し我が父の業を爲さずば、汝等我を信ずる勿れ。然れども我もし之を爲さば、縱(よし)や吾を信ずるを欲せずとも、厥の業を信せよ、然らば父の我に居り、我の父に居ることを汝等悟りて信ずるを得ん」と答へしのみ。此語に徵して渠の意を揣るに、渠は

自らその神なりといへるを拒否せざるのみならず、却て自ら神なる父と親密に一致せるを言明せんと欲せしなり。去ればこそかの猶太人等は此言を質として渠を捕獲し渠を陷阱せんとは爲せしなれ。後ち司祭等の怨恨倍々其度を高め、遂に渠を擒へて大司祭の許に曳き、渠を死に陷れんとして其僞證を索むれども得ず。乃ち大司祭は起ちて自ら渠に問けらく「我活ける神によりて汝に命ず、汝は果して神の子基督なるかを我等に告げよ」と。渠は直ちに答へて「汝の自ら言へる如し」と曰ふ。茲に於て大司祭は衣を裂きて曰く「彼れ神を瀆せり、焉ぞ他に證人を要せんや」と。尋て猶太人に向つて「汝等如何に思ふや」と問ひければ、群聚は聲に應じて「彼は死にあたる」と叫べりき。（以上馬竇福音廿六章六十三以下）此等の語義を推究すれば、基督自ら神の子なるを主張せしこと顯然たり。而して渠は神に對し、唯形容的關係を示せるにあらずして、實に親子の關係あるを明言せるを知るに足る。切言すれば渠は自ら神の性を具ふることを主張せしなり。苟くも否らざらむか、猶太人如何に頑陋なりと雖も、之を以て死に當る大罪なりと狂呼する理由なし。蓋し渠基督が猶太人の聞きて解せし所を拒否せざりしものは、その意、渠自ら神の性を有し、神と一にして自ら神なるを知らしめむと欲せしに由るなり。

夫れ然り然れども單に口舌を以自ら父なる神に遣はされたりと主張せるのみにては、猶以て足れりとするを得ず。故に渠は自ら其所業を以て之を證明せんと欲したり。渠嘗て語りて曰く「我が爲しつゝある事業其物是れ父の我を遣はしたまへることを我が爲めに證す云々」と（約翰五章三十六節）。かく渠は常に、人の信を惹かんが爲に、自己の所業に賴り、其口にせる所之を所業の上に徵せしめむと力めたり。渠又猶太人に向つて曰く「我爾等に告ぐれども汝等は信せず、我父の名を以て我が行ふ業ども是れ我の爲に證をなすなり」と。此他猶かの洗者約翰が其弟子を渠の許に遣はして、「汝はかの來るべきものなるか、或は我等他に待つべきか」と問はしめしに、渠之に答へて曰けらく「汝等の聞きし所見し所を往きて約翰に告げよ、瞽者は見、跛者は歩み、癩病人は淨まり、聾者は聞き、死者は甦る云々」と。渠の屢々種々の奇蹟を行ふや、先づ何の爲めに之を行ふかを述ぶ。列せばかのラザロを蘇生せしめむとするに方り祈りて

「父よ我に聽きたまひしを謝し奉つる、我は固より汝が恒に我に聽きたまふを知れり、然れども環り立てる人々の爲に我は之を白せり、庶幾くば汝の我を遣はしたまへることを彼等信ずるを得ん」と曰へるが如き是ありとす。此種の言に徴すれば、渠は確かに其天の使命を證せん爲めに、此奇蹟を行ひしものあるや瞭かあり。此奇蹟即ち不可思議なる所業の如何あるものなりしかを、一々こゝに列擧せむは餘りに冗長に失し、且つ余輩の論旨に左のみ深き關係をも有せざれば、今は唯其種類の概要のみを摘記するに止むべし。即ち聾者、聾者、啞者、中癇患者、或は癲病患者等の俄然として癒され、又は死者の忽焉として蘇生せしめられ、殊に死後既に四晝夜を經死屍腐爛し始めし者を一言の下に甦らしめ、此他颶風海濤等の無靈物も命に從て其威を收め鎮靜に皈せる等、是れ渠が行へる奇蹟の主要なるもの、渠は此種の所業を爲すに何の手術も要するなく、一擧手一投足の勞をも執らざるなり、單に一言命ずれば則ち足る。例せは「往け、汝が病は癒たり」と言へるが如く又墓中のラザロに向て「ラザロよ出で來れ」と言へるが如き、或は死せる一女子に「女子よ起きよ」と言へるが如き、又或は颶風海波を掀騰し、乘舟將に覆沒せむとし、弟子等の恐怖して其助けを求むるや「默せよ、靜まれ」との一語を以て澎湃たる狂瀾を靜めしが如き此類あり。要するにかの福音を繙き讀一過すれば到處に基督は生命の主宰者にして、又天然力の主宰者たるを顯はし、依て以て自ら天より遣はされ、其性神と一なりてふことを明かし、其使徒及び世々の該教信徒をして、渠は眞に神あり、渠の教は實に神の教ありと確信せしめしを認めらる。而して渠の行ひし奇蹟や其數甚だ尠なからずと雖も、多數の奇蹟中殊に他の奇蹟に勝れたるもの一あり、即ち渠自身の復活てふ奇中の奇、玄中の玄あるもの是なり。渠その死に先たちて、嚮て已れの受くべき苦難を詳細に豫言し、且つ曰く「我は死して三日目に復活せん」と、蓋し渠は屢々此事を語り、以てその復活は自己の天より遣はされし神たる特徴なりと會得せしめむ意なりしが如し。渠果して死せりしか、果して全く死せる後ち復活せしものあるか。之を事實に稽ふるに渠は種々の苦責を蒙り十字架上に磔せられ、諸人は渠の死を確かめ、殊に一兵卒はその携へたる鎗を以て渠の脇腹を貫通し、後ち十字架より下して渠の弟子等がその屍體を發むるや、香料と香油の

百斤以上を用ひ、屍骸を布に裹みて之を墓中に埋め、且つ覆ふに大石を以てし、更に封印を爲せしなり。然れば渠の死は確實にして、寸毫の疑も容るべきなし、縱令猶多少の生氣の存するありしにもせよ、其密閉せる墳墓の中、かの多大なる重量を有せる香料に厭迫せられて、能く呼吸に堪ふべき理は萬あるべからざるなり。渠は確かに死せり、而して三日の後ちに復活し、四十日の間五百以上の人々に現はれつ、殊に其弟子等の眼前に現はれしは、啻に一再にして止まらざりき。爰に最も注意すべきは、基督の復活して始めて二三の人々に現はれし時、之を傳聞せる者共はその嘗て復活すべしとの言を聽けりしにも拘はらず、容易に之を信せずして、自ら目擊せし後ち僅かに之を信ずるに至りしこと是なり。かの使徒の中に多默(トマス)なる者あり、他の弟子等が其の師の復活せるを語りしに、彼は頑として首肯せず、曰く「我は渠の手に釘の痕を見、之に我指を入れ、且つ渠の脇に我手を入るゝにあらざれば敢て信せじと」。後ち數日基督の復たび現はるゝや、渠は多默(トマス)に向て曰ふ、「汝の指を茲に差込で吾が手を觀よ、汝の手を伸て吾が脇に入れよ、信ずるに吝なる勿れ、善く信せよ」と、多默(トマス)乃ち親しく之を檢し、跪拜して曰く、「吾が主よ、吾が神よ」と(約翰二十章の廿五より廿七節)。此事實に據るもかれ使徒等が輕々に基督の復活を信せるにはあらず、從つて彼等は欺罔せられ、又誤信に陷りし虞あらざるなり。

斯くて基督は屢々その弟子等に現はれつ、最終の敎訓を與へ、終に彼等の眼前に此世を去て昇天しぬ、茲に於て弟子等は師の復活の明證を得、固く信じて疑はざるに至りたり。此確信がその證據の確實なる結果として、如何に鞏固なりしかは左の事項に稽ふれば蓋し推測するに難からず。彼れ弟子等が其の師の此世を去て後ち數日、其の師の遺敎を宣傳し始むるや、先づ數旬の前、其の師基督が虐殺せられしイエルザレムの中央に起ちて、師の復活を公言し、官吏の威喝にも畏れず、司祭長の窘迫にも屈せず、公々然斷々乎として己れの信ずる所を宣傳し、之を抑止せむとせる官吏に向つて、我等は口を噤むを得ず、自ら見て以て確信せし所を語る、誰か克く之を禁め得んやと牢固たる決意凜々たる勇氣、前日の怯懦なるに似ず、威武も以て之を屈すべからず、死も以て之を畏怖せしむるに足らざりき。

此の如く基督自ら其神たるを證し、其生死の主宰者なることを示さむ爲め、種々の奇蹟を行ひたりと云ふ。之に對する余輩の卑見を少しくこゝに添加せしめよ。先づ余輩の前に說けるが如く、かれ使徒等の證言は、其の誠實的確なる拒否すべきの由なく、而して基督の自ら神の子なりと言へるものは、其使徒及び世の公衆を欺瞞せんが爲めならざりしこと、渠の言行に徵して知るを得ん。蓋し一たび福音書を繙て、虛心平氣熟々渠の言行を讀み行かば、其智の秀でたると共に其德の完きを見、殊にその謙遜の深き、如何なる場合にも自ら賞讃を求め、榮譽を邀へんとの思念なく、專心その父なる神の榮譽を發揚せむことにのみ努め、その心血を灑いで此世に義と愛とを行はしめむと欲せしを見て、誰人も渠が世を欺き名を釣るが如き卑劣漢にあらざるを首肯し得む。

今や余輩は渠基督の所業に就て少しく論評を試むべきの順序に達せり。抑も渠が自ら神なるを證せむ爲め行ひし處の奇蹟は、果して眞正無謬のものなりしか、別言すれば、眞に此所業は神自ら爲せしものなるか、渠基督の之を明言せしは既に示せし所なり。

此明言せる所若し僞りなりとせば、以て基督は詐欺者、謊誕者なりと謂はざるを得ず、渠が此る汚名を蒙るべき卑劣漢にあらざりしは、余輩の前に語れる如く、殊にその奇蹟ある者は白晝公然群聚環視の前に行はれしものに係り、怨恨嫉妬に燃ゆるが如き渠の仇敵が、飛耳張目渠の所業に過失あれかし、乘ずべきの釁隙あれかしと苛察酷求せしことは、約翰福音書九章に記載せる先天的盲者の癒されし時、彼等の之に就て精細嚴密なる查覈を爲せるを以ても知り得べし。かのラザロの墓前に於ける群衆が、渠の墓石を除かんことを命せし時、死者は既に四日の前に逝けるものにて、其死體は已に業に腐爛し始めしを告げたりき。事實此の如くあればかの仇敵等も以て如何とも爲る能はず、乃ち言をなして之を惡魔の力に歸し、或は幻術なりと誣いしのみ。余輩以爲らく、苟くも基督の所業にして一點疑ふべきの形跡あり、寸毫否むべきの痕あらば彼等飛耳張目の仇敵等は、直ちに以て奇貨置くべしとなし、之を難詰し之を誹議して又後人の喙を容るゝを待たざりしならむ。降りて第二世紀の比に至り該敎の漸く傳播してその信徒の數も頗る多きを加へし日、セルシウスなる學者あり、該敎を批難攻擊し

て頗る激烈の言を弄せしと雖も、而もかの奇蹟の行はれしてふ事實の存在を拒めることなく、唯之を幻術魔法ありとおせしのみ。今日猶該教に反抗を試むる者も、能くその史蹟を研究せる時は、此明確おる事實の存在を拒否し得ず、唯之を以てかの催眠術の一種に屬する現象なりとおす。然れども此見解や、多少神經若くは精神に關する所の病症等に就ては、時として幾分の價値あるべしと雖も、かの基督の事蹟に於けるが如く、先天的盲者が何の手術も用ゆるなく、一言の下忽焉として其明を得、一令克く癲病患者を全癒せしめ、殊に無靈無心の颶風海濤を叱咤し左右するに至ては、到底此見解に基いてその眞因を説明すべくもあらず。玆に於てか余は確信せり、此る奇蹟は眞に奇蹟として承認するの外他に決して道なきを。世人の恒に之を奇蹟として承認し能はざる所以は唯宇宙とその方則との質を誤り、又神と此宇宙との關係に謬見を懷き、豫斷的に奇蹟の不可能おるを固信すればおり。此奇蹟の可能なること、且つ神は奇蹟を現はし得ると云ふのみに止まらず、時として宇宙間の或現象に干渉の手を下し、以て其教義の神性を確かむるは、必缺くべからざるのことおるは、我同志甲君の前に論定せし所、再びこゝに喋々するを要せざるなり。終に臨んで、余輩は日來研究の結果、自ら確信するに至りし所を忌憚なく明言せん。余輩は信ず、此基督教の下、該教の教祖、及び其所業の内にこそ天の意志、神の全能は顯然たれ。此確信は單に主觀的信仰のみにあらず、又想像的構想にもあらず、歴史的事實に依據せるものにて、即ち基督の使徒及び弟子等の生前と死後、及び彼等の性質に證明せらるゝ所なりと。從つて余輩は斷言す、我研究會の目的とせる所、果して天の印證を有せる天授神立の眞宗教を索るに在りとせば、かの基督教を措て他に求むべきものおしと。

此斷定は余輩の認めて以て眞正なりとおす所にして、敢て諸君に此く信せよ、斯く信せざるべからずと强ふるものにあらず、只希くば諸君が克くその研究に於て正鵠を過つおく、眞に價値ある宗教を研鑽して、余輩と同じ歸結に達し、相提携して俱に宇宙の大道に歩まむことを。

（第二）基督教と猶太教との關係を論ず

會長壇に起ちて曰く

我敬愛せる會員乙氏は、縷々數千言、かの基督教の神性に就き、最も精確なる基礎的証論を披陳したり。諸君は之を聽て少くとも、該教は是迄吾徒の探究し來れる他の諸宗教に超えて、最も鞏固なる基礎を有するものなるを認めしならむ。然れども此研究會に於て吾徒の最も重んずる處は、自由論議の主義に在り、斯て各々其所懐を盡し、相磨し相礪きて其眞正なるものを發揮せしめむとするは、豫て吾徒の目的とせる處なれば、若し諸君の中、乙氏の所説に異論を有するものあらば、請ふ忌憚なくその説を盡されむことを。

會長の此言を畢るや、一人の哲學生あり、シガーの煙を長く吐き、其吸殼を火鉢の灰中に埋め、徐ろに起ちて咳一咳漸く口を開きて曰く、

予も會長の言の如く、基督教の基礎の鞏固にして、其證論の精確なるは首肯せり。曩に乙氏の所説を聽て、是迄蔑視し來れることの過ちなるを曉り、自今之に就て研究を盡しみむと決心しぬ、庶幾くは研究の歩の進むに從ひ、今猶予が胸裏に蟠屈する幾多の疑團は漸く氷解するを得むか。然れば請ふ予をして茲に一の疑問を提出し、以て予が疑惑を質さしめよ。予窃かに憶ふに此疑問は我研究會の綱領に適合せるものならむ、即ち吾徒の素より期する處は、この人間とかの最上實在との間に於ける眞正なる關繫を示す宗教を索むるに在り。而して人心の宗教的傾向に徴すれば、此眞正なる關繫の實現せられたるもの、必ずや何れの處にか存せざるべからず、是れ予の固く信ずる所なり。然れども請ひ問ふ、此眞正なる關繫が人間に啓示せられしは、基督の此世に現出せる時に於て始めて之ありしとなすか、這は頗る信じ難きことならずや、抑も基督の其教を立てしや今を距る僅かに一千九百年に出でず。人類の此地上に現はれしは少くとも六七千歳以上の古に屬するや瞭かなり。されば、かの基督以前の人顔は此眞正なる神人の關繫を毫も知る處あらざりしとするか。若しも人間と神との間に結ぶべき此關繫にして眞正なるものならむには、予は憶ふ、神は元始より之を人間に啓示すべきの理あり。勿論その啓示ありしも後日に至りて人類が自家の行爲により、漸く其眞正なる道に悖り、遂に其眞正なる教の幾分を忘却し了りたりとは思惟し能はざるにあらずと雖も、而も斯く思惟せむには少くとも彼の神の啓示は基督の降生に先だつ數千年の

前に在りしものとなさゝるを得ず。之を要するに眞正の宗教あるものは人間を以て、人間の主なる神に繋ぐべきものあれば、其の齡は正に人類の齡と均しきものあらざるべからず、人類と偕に古きものならざるべからず、諸君以て如何となす。

渠席に復するや、會長は再び起て述べて曰く、

今某氏の言ひし處や頗る好し、某氏の提起せる疑問や頗る肯綮を得たり。恰も好し、余が今日諸君に向つて陳べむと欲する問題は偶々此疑問に答ふるに恰適す。余は實に某氏の疑問の提起を以て至幸となす。

夫れ吾徒は當初定めし綱領に據て、曾て人間に在り今猶現に存しつゝある諸種の重なる宗教に研究の手を下だせしと雖も、未だ以て盡せりとはなすを得ず、今日余の陳べむとする所は、猶太教に關するものなり。該宗教は嘗て小亞細亞の一隅に存し、蕞爾たる小國民の有せしものあるに拘はらず。其の教理の高遠にして、その思想の純潔なる開闢以來基督の時代に至るまで他の國民が有したる諸種の宗教に遠く超越し、他の宗教が漸く多神教或は偶像教に墮落して、遂に神に關する思想は人間と水平にまで低下し了り、神に皈するに種々の私慾惡業等を以てし、其宗教の名の下に不義不德遠く倫道に逸せることまでも宣言し、甚だしきはかの禽獸蟲魚草木土石の類までも神として尊拜するに至り、神てふ思想は此くも一般に低下墜落せる間に立ちて、該教獨り我同志の憂に說けるが如き人類の初代に遡るに從ひ重なる宗教の下に見られ得る高遠純潔なる思想を保有したるは、實に千載の偉觀、是れ該教の著しき特點なり。余は爰に諸君の記憶を喚び起さむため、曩に語られたる三四の要點を更に摘說する處あるべし。

神の一体あること、人類の最上主、その審判者は此神あること、及び現世の云爲は必ず來世にその賞罰を受くべしと云ふが如き思想は、上古の歷史記錄に徵するに、人類の源始に於て神が人間に啓示せる眞正なる宗教の概要なるべしとは、苟くも此點に就いて研究を試みしものゝ齊しく認むる處なり。かの猶太教には此る思想の含有せらるるのみならず、猶この一体なる神に就て該教の有せる思想は、未だ曾て他國民の間に覓め得べからざる高雅雄大なるものなりとす。該教に於て尊拜せる神は、萬物の造者にして、一令の下に能く宇宙の有ゆる森羅萬象を創造し出せる全能者、天地の最上主、

全智全善にして而も無限なる慈悲の神なり。神の性德を讃美せる該敎の種々なる記錄は、其の思想の高尙典雅なる遙かに他敎の經典の及ばざる所あり。それ此の如く猶太敎に於て拜禮せる神、且つ萬事に就て必ず其權下に服從せざるべからずとなせる神の思想は、遠く他敎に超越せるものありき。偖該敎に於ける最も顯著なる點は、單り該國民の神に對せる思想が他の宗敎のものに遠く超越し、且つ古來の大哲學者が神に關して懷抱せる處說の遙かに到達し得ざる境に在りしのみに止まらず、此高潔深遠なる思想を克く純粹に維持保存せしこと是ありとす。余は猶太國民の歷史を繙く每に、該國民が常に異敎民に接觸して、絕えず彼等の處業に感染し、或は多神敎を拜し、或は偶像敎に陷らんとせる傾向ありしにも拘はらず、能く一時の迷夢より醒覺して永く彼の高尙なる一神敎を維持せしに感嘆せずむばあらず。請ふ諸君暫く余が爲に倦怠を忍べ、余は更に少しく之が詳を語らむ。かの猶太國民は偶像を造るに至り、其後アッシニア及びアッシリア人民と接觸し、其の宗敎に化せられて、再び偶像敎に陷るの傾向を現はせしが、彼等は遂に他國民の如く全然之に惑溺し了はらずして、克くかの一體なる神を忘却するに至らざりき。替言すれば該國民は他國民と異りて、縱令一時眞道に悖戻せることあるも、彼等の中には代々預言者なるもの起り、彼等の迷誤を叱責し戒飭して、克く眞正なる神の拜禮に復飯せしめしあり。以上の事蹟を熟考するに、該國民が曾て他國民の想ひ及ばざりし高尙なる神の思想を有し、屢々多神敎と偶像敎とに傾向せしにも係らず、克く此眞正にして高尙なる宗敎的思想を維持し得し所以のものは、恐らく天然の道理に據て說明し得べきにあらず、必ずや超自然的事蹟と見ざるべからず。余は信ず、彼等猶太國民の拜せる神は、彼等をして、他の諸國民の一般に多神敎に沈溺し、卑猥なる偶像敎に墮落せる間に立ちて、かの眞正なる宗敎的思想を維持せしめ、此思想を人間界に滅盡せしめざらむ爲め、彼等を以て之を保護せしめしものならむと。

斯く言はゞ諸君の中或は余の所說に疑團を懷くものあらむ、曰く、若しも果して猶太敎に於て神と人との眞正なる關繫を認め、且つ該國民が天より啓示せられし宗敎を純然無雜に維持せしものとせば、所謂眞正なる宗敎はかの基督敎にあらずして、猶太敎

なりと斷せざることを得ざるべしと。夫れ然り豈夫れ然らむや、請ふ余が今より說かむとする所を聽け、蓋し思半に過るものあらむ。余は言はむと欲す、該猶太教は基督教の先驅なり準備教なりと。語を換て言はむか、斯く神が猶太國民をして宗教の眞正なるものを維持せしめしは、後年基督を此世に降し、渠をして同じ教義を敷演しつゝ之を完成せしめ、加旃自らの生命を犧牲に供して、開闢以降世の終末に至るまでの人類の罪科を償はしめ、以て救贖の事業を完うせしむる準備たりしなり。さればこそ神の啓示せし眞理を保有せし該國民は、軈て其教理を完成すべき基督の世に來るべきことをば待望せしなれ。實に救主たる基督の將來降世すべしてふ此思想は、かれ猶太國民の爲に重要なる信條たしあり。否彼等の爲には唯一の生命たりしなり。彼等の生命たりし此思想の中に含まれたる詳細の條項は抑も如何あるものなるぞ、之を檢せむと欲せば、かの太古より今日まで傳來せる所謂聖書、即ち希伯列亞民の神聖ある經典にして現に猶該民族と基督教徒との手に齊しく保存せらるゝ記錄に依據せざるべからず。爰に此思想の概要を摘示せむに、先づ猶太人は救主あるものゝ降世を太甚しく渴望せり。此救主は猶太族にしてダヴヰド王の系統より出でざるべからず、渠は宗教の改革を成すべく、而して神と人間との關係を完成すべし、渠の世に降りし後は、一體の神を拜する者獨り猶太國民に止まらず、その教は徧く地上の到處に、世々に宣布せらるべし、斯くて天下の國々には其教を奉ずる者生ずべしと是なり、かの預言者なるものゝ所言を載錄せる記錄を繙かば、此思想の到處に極めて明確に說述せらるゝを見るあらむ。然れども此預言中の或るものは單に一瞥せるのみにては、稍明快を缺くの感なき能はず、是れ蓋し預言の性質として、唯將來起るべき事實を前言せるものなれば、後日その事實の成るに及びて、之を目擊せる者が、その曾て語られたる所即ち所謂預言に參照して、始めてその事實の眞に預言に應驗せるを認め得べきを以てなり。されば基督の降生以前に語られたる彼の預言を取て、之を渠が降生後の事蹟に對照し、茲に始めてかの預言の渠が身に於て應驗せるを認め、渠獨りかの預言を成就せるを知り得る也。何となれば前記の明確なる預言に錄されたる如く、基督の他、猶太の種族ダヴヰドの後裔より出でし者にして、宗教の大改革を成せしものあらず、獨り渠のみ

古來未曾有の宗教的大改革を成し、且つかの神と人間との關繫の啓示を大成し、而して渠の時より世界到處に渠の教は代々宣布せられ、聽て歐洲の大陸を風靡し、遠く極東の諸國に及び、同教の一たび入れる所、一體の神は拜禮せられ、多神教は滅び偶像教は倒れ、今や普天率土同教の光輝に照破せられむとすればあり。尙一歩を進めて少しく之が詳を語るべし。第一、基督の降誕せしは、全く政權の猶太族より離れ去りし後ありき、(創世紀四十九章十節の預言に應ず)。第二、渠はベトレヘム邑に生れたり、(ケミヤス預言書五章二節に應ず)。第三、渠はダヴ井ドの後裔にして未通女より產れたり、(イザイアス預言書第八章及第十一章に應ず)。第四、渠は銀三十枚を以て敵に賣られき、(ザカリアス預言書第九章九節に應ず)。第五、渠は無罪の身を以て罪人と偕に刑死せり、而して其の死に先だち、罵詈誹謗侮蔑詬辱の有らむ限りを蒙りしに拘はらず、彼等仇敵の爲に其の赦宥を祈りたり(イザイヤス預言書第五十三章に應ず)。第六、渠は自ら神の子なりと稱し、渠の仇敵等は渠に向て其神たるを証せむことを求め、且つ神の渠を仇の手より救はむことを求めたりき、(智書(サジエツス)二章の十二及十八節に應ず)。第七、渠の刑架に上れる時、渠渴を感せしに仇敵等は渠に膽汁と醋とを飲ましめぬ、(詩篇六十八の廿及廿一節に應ず)。第八、渠の仇敵等は渠の手と足とを釘うち貫き、且つ其の衣を爭そひ、其上衣を抽籤せり、(同書廿一及其他に符ふ)。第九、渠は耶路撒冷(イエルサレム)の聖殿の建てられしより七年宛七十週目に死し、其死後耶路撒冷の犧牲は絕え、頓て其聖殿は毀たれ、耶路撒冷の市街は破壞され、渠を殺せる國民は國民としての生活を失へり、(ダニエル預言書九章廿四及び廿七に應ず)。第十、渠の墳墓は尊敬せられ、渠の教は世に擴まり、渠は諸國に拜禮せらる、(イザイアス第十一章の廿一節及び其他諸所の記載に應ず)。

夫れ此の如くかの預言者等が後日世に來るべき救主を豫め告ぐるの目的を以て語り置きたる預言を、渠基督の事蹟に對照すれば、克くその應驗あり、渠の身に於て悉く成就せられたるを見る實に奇觀と謂ふべきあり。是れ決して偶然に符合せるものとして說明し得べきにあらず。此の如く遠きは幾千年、近きも數百年の前にありて預言せられたる事實の、幾百年若しくは幾千年の後に至りて、宛も符節を合するが如く、精密

に適合せる所以のものは、その原因唯一のみ。即ち未來を洞觀し、且つ史的事實を統轄し得べき神の力の干與是あり。論じて茲に至れは、かの猶太教あるものは毫も基督教の眞正を害ふものにあらず、否却て之が確實を證するものと斷せざるべからず。即ち彼猶太國民を以て眞正ある宗教を保存せしめ、此國民の信仰を以て後日來りて全世界の爲め眞正ある宗教を完成すべき基督の降世を準備せしめ、尙且つかの後日來るべき救主の思想と、渠基督の事蹟とを對照して、基督教の實に天授神立なるを世に會得せしめむとする神の攝理と謂ふべきなり。余が猶太教を以て基督教の先驅なり準備教ありと爲せるもの豈偶爾ならむや。日來研究の結果。余の斷言し得る所此の如し。諸君請ふ措辭の當を得ざるものあるを咎めず、意の有る所を察して偕に共に尙詳密的確ある研究を遂ぐるの資に供せられむことを。

(第三) 基督教と回々教との比較

座に疑議を唱へし會員中の一哲學生は、劈頭開口陳べて曰く、

會長閣下、余は閣下に多謝す。余が腦裏には嘗て基督教に關する疑雲惑霧の聚積せるものあり、爲めに該教の眞價を認むるに由なかりしが、幸にも前席に於ける閣下の明快ある答辯によりて多年の疑惑を一掃し得たるは、實に閣下の賜として深く余の歡喜する處あり。余は始めて、基督教が彼太古史上に散見する處の宗教的眞理を包有し、且つかの猶太教の純潔に維持し來れる宗教的眞理をも含蓄し、加之世界中最高尙最純潔なりし猶太教に預言せられ、準備せられ、而して嘗て會員甲氏の述べられたる立證に其基礎を有するものあるを認識せり。從て該教こそ吾徒の索むる眞正ある宗教の特質を有するものにして、決して他教と日を同うし論ずべきにあらざるを信せり。然れども亦顧みて思ふに、天地剖判以來宗教的眞理を傳へ來りし猶太教を繼承せるもの、獨り基督教のみなるべきか、基督教の他に正統の繼承者果して絶無なるべきか、余は猶之を以て疑問とあす。余は未だ深く研究するの遑あらざりしが故に、詳かに之を知らずと雖も、かの回々教の教祖摩哈默多(マホメット)の如き、自ら稱して余は猶太教の爲に摩西(モイゼス)がおしたる事業の繼續者なりと言ひ、且つ假令基督を認めて神の代理者ありとするも、自らは其神の最後の代理者なりと主張して該教を開創せしものなりと聞く。而して該教を

奉ずる者はその數幾百萬人、今や阿非利加及び亞細亞の西部を蓆捲し、進むで印度より支那諸州に蔓延し、儼として尨然たる一大宗教をなせるにあらずや。此大宗教の教祖に關し、將たその教義に就いて諸君の見る處如何。該教は果して眞正なる宗教の特質を有せざるか、該教の教祖が自ら言へる處は以て無稽の誇言となすべきか、該教は毫も吾徒の研鑽に値せざるか、敢て諸君の辨明を煩はす。

會員甲氏徐ろに進むで壇上に起ち、莞爾として鼻下の美髭を一捻し、さて説き出して曰けらく、

寔にかの回々教は吾徒の研究に値すべき宗教なり。蓋し該教は啻に大に蔓延せるのみに止らず、其の教義には神に關する最も高尚なる思想を含み、且つ其信徒の心に宗教的信念を深く扶植するの力を有し、今日猶該教の信徒は熱誠を凝らして、日に幾回となく祈禱をなし、或は斷食し、或は巡禮し、路の遠きをも厭ふなく頻々之を行ひつゝ在るは、吾人の毎に感嘆して措かざる所なり。夫れ然り、然れどもこれが故に直ちに該教を以て神明の加護に由り茲に至れるものとなすは、蓋し大早計たるの誹りを免かれず。該教が神より傳承せるものにあらざるは之を檢する難きにあらず。請ふ思へ、眞の神が一體のみある以上は、此一體の神が啓示したる眞の宗教も亦必ず唯一不二なるべき理にあらずや。基督教と回々教と共に眞正なる宗教として兩立し得べからざるは今更に喋々の辯を須たず、試に回々教を取て基督教に比べ見よ、其差月鼈霄壤のみならず、一目にして其の孰れが實に神の教なるやを知るを得む。渠摩哈默多（マホメット）は自ら稱してガブリエル天使より啓示を享けたりと云ふ、然れども渠は其天の使命に就て何の證據をも有せざるなり。亞剌比亞人の聖典、所謂コーラン經の第十八章九十二節及び九十五節を見るに、摩哈默多は自ら奇蹟を爲すを辭して曰く、余の天の使命を享けたる所以は、斯教を宣傳するに在りて、奇蹟を行ふが爲にあらずと。是れ明かに渠が奇蹟を行はざるを自白せるものにあらずや。殊に余輩をして奇異の思に堪へざらしむるものは、渠に啓示を與へたりと稱せらるゝガブリエル天使が渠と交通せりと謂はるゝ場合は、屢々奇怪なる場合に屬すること是なり。例せば渠摩哈默多は多數の妻女を有し在り、嘗て其中の一人を偏愛せるにより、他の妻女の嫉妬を惹かんことを恐れ、之を緩和せむ爲め語りて云へるあり、曰く、ガブリエル天使余に告げて曰ふ、其の妻女を

偏頗なく待遇すべしとの義務は曾て有ることなしと、（コーラン經第三十三章五十一節）此類あり。由是觀之ば渠がかの天使と交通せりと稱するは、漫りに言を之を藉りて、人の宗教心を濫用せるものと謂はざるべからず。尙他の一例を擧げむか、渠一日その養子ゼナブと云へる者を訪ひしに、偶々ゼナブは家に在らず、其の妻獨り在りしを見、乃ち彼女に言て曰く、神は自已の意に隨ひて人の心を左右すと。彼女は其意を解し、驟て飯り來れる夫に向ひて、渠摩哈默多（ホメット）の言を告げぬ、夫は乃ち其意を了してその妻を離別し、之を摩哈默多に遣りたり。時に摩哈默多の弟子中此事を聞て呟ける者あり、尤彼等の呟けるは離婚の非を鳴らせるにはあらず、唯摩哈默多とゼナブとの間には父子の名義の存せるが爲なりき。恰も好し、此時ガブリエル天使は摩哈默多に現はれ、渠に教へて曰く、義父子の關係は斯る婚姻を妨ぐるものにあらずと、（コーラン經第三十三章四より卅まで）噫何たる不倫、何たる破廉耻ぞや。斯教の道德的理想を捉て之を基督教のものに比較せば、其差實に天淵啻あらざるにあらずや。基督教は婚姻の一結解くべからざるを教ふ、且つ貞節の德に就ては實に高潔尙ぶべきの教義を有す。回々教に於ては則ち否らず、男子たるもの隨意氣儘に其の妻を離別し得るのみあらず、多數の妻妾を蓄ふることを得、且つ正妻として四名の婦を有するを許し、尙且つ腕力或は金錢によりて奴隷的妾婦を獲、之を蓄ふこと任意にして、其の制幾人と云ふ定めあらざる也。實に全然放任主義にして、人々自由に其放肆淫逸を逞うするを得。此他猶かの奴隷制度に對するが如きも、基督教はその教義として之を否認せるの傾向あり、且つ實際之が廢止を實にせりと雖も、回々教は之に反して、奴隷を以て全くその主人の所有物ありと教へ、その教徒は古來奴隷の買賣をなし、今日猶阿非利加及びシルカシア等に向つて、此目的の爲に旅行する隊商の數、年々決して尠からざるなり。轉じてその布教の主義を檢するに、基督教に於ては素より温和を以て人を化導せざるべからずとあし、教祖基督はその使徒に告ぐるに、躬親ら嘗て迫害せられしが如く、彼等も頓て窘迫せらるべきを以てし、迫害を汝等に加ふる者に向つては、堅く忍ぶ處あかるべからずと誨へ、且つ親ら身を以て之が活模範を垂示せり。回々教は之に反して由來武器の力に訴へて他を征服せしものなり。その軍門に降りし國民は亦該教にも服從するを要せしなり。少くとも該教民の

爲に苛税の誅求に忍ばざるべからざりき。渠摩哈默多（マホメット）は如上の主義に據て、その敎を擴布せむ爲め、軍隊を率いて征討に從ひし時、自ら隊商を劫かしてその貨物を掠奪し、其の五分の一を收めて已れの分捕となし、且つ捕虜中の婦女の最も嬋妍たる者を擇びて自家の妾とおせしことさへもありぬ。渠が此の種の處業何を以てか白波綠林の徒と選ばむや。此他猶基督敎と回々敎とを比較すべき點夥多ありと雖も、今は暫く上に語れる處を以て足れりとせむ。之を要する渠摩哈默多は己が天の使命に就て何の証據をも有せざるのみならず、その言行に徵すれば、單に國俗を利用して野望を逞うせし一奸雄に過ぎざるあり。苟も渠が立てたる回々敎を以て天授神立の敎ありとせば、結局人間は能く高尙純潔なる道德を敎へ、神は却て亂暴放肆悖德不倫の言行を指嗾したるものありと斷せざるを得ず、天下豈に此の如き非理あらむや。我敬愛ある會員諸君、諸君の中誰か回々敎を認めて敢て神授の眞敎とおすものあらむや。

（第四）　基督敎諸派に就ての研鑽

會長は席を副會長に讓り、自ら演壇に起ちて曰く、

諸君、今や吾徒はかの基督敎諸派の中、孰れか眞正無謬のものなりやてふ最終問題を提起すべき機に達せり。吾徒は曩に既に該敎と他の諸宗敎とを比較稽査し、又該敎自ら提供せる證據を檢覈して、該敎の眞正なる宗敎たるべき表徵を有するを見たり。然れども亦退て惟ふ、歐米の諸洲は勿論、現に我邦に於ても見るが如く、名は齊しく基督敎と稱すと雖も、實は幾多の宗派に岐かれ、互に鬩爭するの狀、一見佛敎と相類するの感あらしむ。從て該敎も亦他敎と均しく人の隨意に解釋するを容るし、異論百出新說踵起その底止する所を知らざるもの、如く、人をして是亦專ら人間の想像に由りて成れる宗敎なるなからんやの思あらしむ、苟も神授の眞敎あらむか、其の敎ふる處必ずや唯一不二あらざるべからず。該敎の如く幾多の分派ありて其敎ふる處多少の異議を含み、甚しきは互に相矛盾し相牴牾することあるもの、安むぞ以て唯一なる神の敎と爲すを得む。是れ宜しく吾徒の一考に値すべき疑問なり。斯く思惟する者蓋し世に尠なからざるべし、否諸君の中にも或はこれ有らむ。夫れ然り然れども更に飜て考ふるに是れ其一を知て未だその他を知らざるの論あり。試に思へ、縱し該敎に幾多の宗

派ありて、其の教義の異れるものあるにもせよ、その異れるもの一切を擧げて皆純正ありと稱すべからざると同時に、一切を斥けて皆謬妄ありとも斷ずべからざるにあらずや。かの明判官が原被兩造を愼重綿密に審糺して、然る後ちその裁斷を下すが如く爲す時は、何れの處にか其純正あるものを認め得ずとは謂ふべからず、果して純正ある基督教の存するあらむか、その教は必ずや確固たる證據の以て徵すべきものあかるべからず。吾徒の嘗て見たるが如く、該教を以て神の教とあす時は、確かに何れにか其明確ある特徵の存すべき道理あり。果して該教の說けるが如く、神は其代理者として基督を此世に遣り、以て自らの教を人間に傳へしめしものあらば、その教には必ず一定不變の意味ありて、見る者聞く者の隨意に之が解釋を放任すべき理由なし。苟も否らず、神は人間に是れ我が教ありと啓示しながら、汝等之に如何なる解說を附するも予は關せず、這は予が唯一の教あれども、汝等の都合に由りて之を幾多の教とあすも、予の與り知る處に非ずと宣へりとせむか、然らば神は何が故にその教を人間に傳へしや、其理毫も解すべからず。何の爲に基督を此世に遣はし、その天の使命を証

せむが爲に種々の奇蹟を行はしめしや、是亦その要を見る能はず。從て基督が天の使命を得たるは全然無用のことゝあり了らざるべからず。惟ふに神は必ずや其の教を謬なく後昆に傳ふべき方法を定め、又世々の人々が其の教に就て眞僞を質し得む爲め、基督の教へたる處を正しく傳ふる權を有する機關を立て、億兆の民世々に此者に聽從して、神の教の純正あるものを知り、且つ遵守すべきやう、豫め其道を講ぜらるべき理あり。余は研究の結果躊躇なく斷言す、基督教は慥かに神の教なり、故に前述の道悉く備はると。請ふこれより逐次其理由を解くを聞け。

先づ爰に新教と稱する諸派に就て概說せむか、幾多の該派が齊しく主張する處に據れば、基督教の信條に就て、其の眞僞を辨ぜむが爲めには、信徒各自の自由解釋に委するを以て正しとす、換言すれば信徒は各自其智に訴へ、又各自が享くる聖靈の感導に依て、聖書を解釋し、其の正意を誤りなく認め得べしとあす。是れ果して當を得たる說なるか。余は信ず、此の如き方法の正しからざるは、既往の經驗明かに証して餘りあり。と。蓋し此方法にして、慥かに基督の教を純潔に保存し、その眞僞を正確に判

別し得べき道あらしめば、何が故に當眼不可爭の事實が示す如く、斯くも多數の分派を生じ、各々相異れる教義を有するのみあらず、同一派の中にすらも、其信徒各々頭腦の異るに從ひ、種々撞着矛盾せる異說の生起せるにや。かの獨逸國に於ては、此自由解釋の主義その極端に達し、今や多くの宗派は基督教を以て人間の案出せる教と見做すに至り、從て彼等は偶然にも自家撞着を演ずるを免かれたり。何とあれば他の宗派は猶基督の教を以て神の教と認むるにも係はらず、その之に對する態度を見れば宛然人間の作出せる教なるかの如く爾るに反し、彼等は始めより人間の作りたる教なりと見做し居ればなり。去れば或宗教は新教に此る傾向の存するを覺り、基督教が神の教としては將に滅亡の期に瀕むとするの兆あるを憂ひ、其由て來る處を探究して、新教には確たる教權を有する機關の缺如せるが故あるを認め、此缺陷を補はむとして孜々汲々たるの觀あり。かの監督教會の如き嘗て其の信仰の統一を圖り、所謂監督會議あるものを設け、此目的を達せむと企てしも、其事遂に畫餅に屬せしは事實あり。是れ何故あるか、他あし、斯くして新たに設けられたる信仰統一の機關なるものを、信徒の側より觀る時は、この機關に謬なく信仰を傳べ得る特別の權能ありとは認むべからず。又新教の根本主義に據る時は、彼等監督會議の議定せる處に服從すると否とは、各人自由の撰に屬す。詳言せば各人自ら見て、その議定の條項是ありとせば、之に服すべきも、苟も自ら認めて非とせむか、直ちに之を排斥して服從することあかるべし。その企圖の成功し能はざる亦宜あらずや。監督派以外の新教派にてもその牧師たるもの屢々信仰の統一を試み、毎に失敗に終り、却て別派の分立を促がす因たりしもの、蓋し此理由に他あらず。

次にかの希臘教會は如何、借問す、基督の教義を傳紹せむ爲め、須臾も缺くべからざる不能謬の教權を有する機關ある者は抑も何處に在るや。コンスタンチノプルの教宗か、將た渠に分離して露國皇帝の下に、其の選任によりて成れる聖議會(サンシノド)か、儻しこれ有りとすれば其據證は那處にありや、是れ到底正當の解說を聞くべからず。初めコンスタンチノフルの教宗フオシユースなる者が、羅馬の教會と分離せむと爲せし時、數多の司教は全世界の聖會を代表して、所謂公會議を開き、審議討究の末、フオシユー

ス の説を罪し、之を排斥せりき。其後渠の相續者として、希臘教を創立せし者は慥かに公會の決議を蹂躙し、公教會に離反して此教會を設立せしや言を俟たず。去れば其信仰の統一を維持すべき教權なるものは、必竟何れの處より獲しとするぞ。又露帝ペートル第一世が聖議會の制度を掇め、その會員を選任するの權は露帝の掌中に在りと稱せりと雖も、是亦何の證據ありて此教權を彼會に與へしものぞ。共に思議すべからざるの至りなり。

之に反して獨りかの加特力教會、即ち公教會と稱するものに至りては、當初以來到る處にその信徒の同一の信仰を保てること、是れ顯著蔽ふべからざる現象なり。何が故に彼はこの現象を呈せるか、之が由て來る處を察するに、該教會に於ては、古來如何なる信徒も、世に不能謬なる教權を有する機關の儼然として存在せるを認むるが故なり。去れば彼等は其信條に關し何事か異論の教會内に起るあれば、之が正否を質さむ爲め羅馬の教會に訴ふるを常とせり、這は單り羅馬が帝國の首都として繁盛を極めし時代のみに限らず、コシスタンチノプル遷都の後、該地の盛大に至り、羅馬の衰微していその勢力毫も振はざりし日に於ても、羅馬の教會は依然として全世界の聖會の中心と認められ、此處のみ宗教を統宰すべき最上主權の座と認められたり。羅馬の教座を占めし者よりも、數層智德の優秀なる司教學殖の深遠なる博士の他教座に起りしにも拘はらず、依然として羅馬の司教のみ全世界の教權を掌握せり。何時も、何所よりも、信條の眞僞を質し、聖會の儀式典例等に就て裁決を乞ひしは、羅馬の教座に向てなりしこと、歴史上決して否むべからざるの事實なり。斯く全世界の聖會より羅馬の教座に訴へ、その裁決を仰ぎし所以のものは、該教座のみ獨り全聖公會の主權を掌握せりと確認せられたるに由る。而して該教座が此主權を有せる所以は、聖書に錄されたるが如く、又かの基督の時代に最も接近せる解説家の一般に言へるが如く、基督はその授けたる神の教を、世の終末まで、汚さず傷けず、純全に保存し、無謬に説明せしめむ爲め、其の弟子の一人伯多祿なるものを選び、渠及び渠の相續者に聖會の最上主權を賦予し、紹繼せしめたればなり。かるが故に伯多祿以降、現教皇レオ十三世に至るまで凡一千八百有餘年、羅馬の教座に陞りたる司教は、代々伯多祿の後嗣者として、此

主權を實行し來れる也。是れかの希臘教、新教おどの教の起らざりし以前より、主張せられ實行せられたる處とす。斯く加持力教會獨り信條の眞否を裁斷する主權なるものを世々に具備し、その權を終始實行し來れる事實に徴し、而して基督教が當さに斯くあらざるべからざる所以を、一考するのみにても、該教が神授の眞教たるを認識するには足りぬべし。

此他猶羅馬公教會を除いて他の教派が、教祖基督より繼紹せる純潔なる教會なりと主張し得る資格なしと斷ずべき所以は、彼等諸宗派の皆明かに當初以來傳承し來りし教會を分離して、新たに建てられたるものなりと云ふ事實なり。看よ聖書の語れるが如く、基督は特にその教會の代表者と選びし伯多祿に向て『汝は「ペトロ」(即磐石の義)なり、余此磐石の上に我教會を建てん。地獄の門は之に勝つこと能はざるべし』と言ひ、又『汝の信仰の置きざるやう、余汝の爲めに祈れり云々』と言ひ、且又その使徒に約して『余は汝等と偕に日々に世の終末まで在るなり』と告げ、以て其教會は永く渠の保佑によりて、その教を謬なく傳へ得べき約束ならずや。此に由りて予は確信す、基督の教會なる者は當初以來今日迄終始繼續して傳はり來りしものならざるべからずと。

偖之を史籍に徴し事實に稽ふるに、基督以來間斷なく繼紹し來りしものは、獨りかの羅馬加特力教會即ち公教あるのみ。其他の宗派に至りては、其創立の時代遥かに基督の時代を距ること藪ふべからず。先づかの新教と稱する諸宗派を見よ、彼は第十六世紀の交に到りて始めて唱道せられたる者あらずや。而して之を歐米諸國には「プロテスタンチスム」と呼ひ、我邦に於ては新教と稱すと雖も、此新教なる語既に教會なるものゝ本質に悖れるを自白する也。故如何と云ふに、若し人間の創始したる教ならむには、或は其思想の變遷に伴ひ、その教理を新たにするの必要あるべしと雖も、苟も神の立てたる教ありせば、後世之を人力もて改革變更し得べき道理なければなり。加旃かの改革者と稱するルーテル(カルヴァンにせよ、ヘンリー八世にせよ、彼等は皆初め加特力教を奉じ、之か信仰を表白せしに係らず、後日種々なる事由ありて、卒然該教に反抗し、宛かも枝葉の根幹に離れしが如く、分離せしものあるは炳焉火を

睹るよりも瞭かなる事實なり。かの希臘教を創始せし者も亦同じく一の反抗より分岐せしや爭ふべからず。其の分離せし所以は渠の唱道せる所、公教會の信ずる所と異あり、爲めに離教として排斥せられたるに由る、この分派の當時基督の教へし眞正あるる教義は、その孰れに存せしものとすべきか、反抗し分立せし少數者に在りしとせむか、將た依然として舊來の信仰を維持せし多數の公教者に在りしとせむか、敢て余の斷言を須たずして知るに難からじ。

更に請ひ問ふ、當時眞正なる信仰は、かの基督の約束に違ひて、公教會の全體より消失し去り、彼等フォシユース、ルーテルの徒は之を蘇生せしめむが爲め、新たに天の使命を受けたりとせむか。さらば其使命を享けたる證據は那處にありや。歷史を繙け、其處に誰人も彼等が羅馬の教權に反抗せし所以を讀むを得ん。歷史は曰ふ、フォシユースが羅馬に叛いて分立せし所以は、羅馬の教權を嫉むで自ら東教會の首長たらむと欲せし驕慢の心に在りきと。又英のヘンリー八世が背教の起因を說て、渠が正后を黜けて他の婦を納れむとせしも、教皇の固く執て之を許容せざるに胚胎すと。ルーテルの反抗に就ては曰く、渠の主張せし說が羅馬教皇の准許を得ざりしを憤れるに因ると。以て彼等が反抗の主因の天の使命を受けたるにあらざることを知るに足らむか。蓋し歷史を一見せば誰人も容易に其教派の起因を探究し得て、基督の眞の教會は何れに在るかを認め得む。前にも言へるが如く、若しも基督教を以て人間の創始せしものと爲むには世の思想の變遷に從て、時々之に改善を加ふるの必要あるべしと雖も、該教徒の唱ふるが如く果して神より傳承せし教ならむには、又果してその神の教を純潔に後昆に傳へむには必ずや此世に於て不能謬(インフヱイヒリテ)の教權を有する機關ある者あかるべからず。之に依據して始めて其教は純潔に後世まで維持せらるべく、億兆の信徒は安むじて之に聽き以て誤謬に陷り回すべからざる不幸を招くの虞を免かれ得む。此資格を具ふる者獨り加時力教會即ち基督公教これあるのみ。基督が『世の終末まで偕に在るべし』と約せる者、豈此教會なるなからむや。以上の所見によりて余は斷々乎として明言す、諸宗教中眞に神の宗教と謂ふ可きものは基督教あり、基督教中實に神の啓示せる教と見る可き資格を具ふる者は、獨り加特力教即ち公教是のみと。吾徒が研究の結果、他

の諸宗教諸宗派は此缺くべからざる教權を有するものにあらず、從て信仰の變動を防ぎ、其統一を保ち、代々に謬なく其教義を宣傳し得べきものにあらず。略言せば眞正ある宗教の資格を有せるものにあらざることを、余輩は確かに認め得たり。由來宗教界には爭議異論の生ずること罕ならず、此場合に際して、一個人の見を以て其眞正あるものを識別し、以て過ちなきを得ることは決して保し易しとせず。さればかの公教の如く神より教へられたる信條に基き、儼たる教權を有するものに據るを得ば、單に道に忠實なるに止まらず、又實に安心の道にして、人生之に優るの幸福やなかるべし。

（第五）餘論及び歸結

人あり問ふて曰く、加特力教にして果して汝の言ふが如く唯一眞正の教あらば、何が爲めに然く世に誹難攻擊せらるゝの太甚しきやと。余は一言にて之に答へむ、曰く眞理あればこそと。古諺に曰はずや、高樹風に苦めらるゝ多しと、加特力教は遠く他宗派に秀でゝ嶄然頭角を顯はし、最も高き地歩を占む、古來諸方面より種々の攻擊を蒙り、之に關して幾多の謬說或は誤解の屢々傳播せられたるもの、亦高樹の風に苦めらるゝの理か、否乎。余は此種の謬說に惑はさるゝこと久しかりき。這回諸君と此研究を偕に共にし、始めてその誤解に出でしを知り得たり。兎に角此る價値ある宗教が斯く攻擊の矢を受けたること深く怪しむべきが如くにして、其實決して怪むに足らざる也。かの知名の學者ウーレル氏が嘗て曰へる如く、若し數學上の眞理をして道德或は宗教に關鍵するものあらしめば、其の正確あるに拘はらず、世人は必ずや之に反抗し之を辯難すべきあり。如何となれば道德或は宗教は一面必ず人の私慾に反對するものあるにより、其事の眞正なるに從ひ、愈々强く之に反抗せむとするは人慾自然の趨向あればなりと。今余は加特力教を辨難攻擊する一切の諸說を列擧して、之に答辯を附する遑あしと雖も、其中の主要なるもの三四を擧げて、其誤謬の點を指摘せむとは欲する也。諸君、請ふ他は類推して之を知るの捷徑を取られむことを。

夫れ加特力教以外の基督教と稱する諸派は、既に前にも言へるが如く、皆加特力教會に反抗して起りし者あり。希臘教の始祖とも謂ふべきフオシユースを始めとして、新

教の開祖ルーテル、及びカルヴァンの徒に至るまで、當初自ら遵奉せる信條を排斥し、己れと志相似たる少數者と共に、聖會の團體を離れて、自立せるものなるは顯著蔽ふべからざるの事實あり。就中かの新教は殊に多數の信條を刪除して遠く加特力教より逸出し去りしが故に、その歴史的根原の説明に於て頗る困難を感じたる者の如し。何を以て之を知るか、中途基督教會の體を離れて自立せる者が、自ら基督の眞正なる教會あり、自ら眞正なる基督教を奉ずる者なりと主張するは、殆んど出來得べからざることなればなり。而も彼等は辛うじて一説を案出して曰く、抑も基督の教會なるものは、特に、代々傳へ來りし有形の組織を具備し、信徒と司祭及び司教等の位階を有せる教會のみに限るにあらず、基督の定めたる教會は唯その教を信ずる精神界の無形的團体なりと。從て之を敷演すれば、基督の教會は既に無形的團体なり、無形なるが故に其團体は分離すべきものにあらず、されば新教も分離したるにあらず、依然其團体を繼承すとの義となる。説や巧なり、然れども是れ自らその起因を蔽はむ爲に設けたる口實に過ぎざるを奈何せむ。史を繙て之を事實に徴するに、基督の將に此世を去らむとするや躬親ら其代理たるべき聖會なる者を設定し、之に委するに其教を世に宣傳し、且つ洗禮を授くる等の任務を以てしぬ。此等の任務は則ち無形的のものにあらず、萬人の親しく目睹し得べき任務なり。假りに彼等の主張せる如く、基督の教會は無形なるものなりとせむか、然らば如何にして人は之に倚頼すべきぞ、如何にして人は其指導を仰ぎ、その援助を求め得べきぞ。斯く思索し來れば余は信ぜざるを得ず、基督の眞正なる教會は必ずや世人の齊しく目睹し得べき有形的團体にして、基督の當時より今日に至るまで連綿繼續し來れる者ならざるべからず。又此團体より分離せる該教諸派は、明かに其本幹たる眞の基督教會より截斷せられたるものなりと。

又或一派は加特力教を誹難して曰く、加特力教會は強て基督の位を簒奪せり、即ち人人の救靈は之を基督の功力に須たずして、一に教會の力に倚頼すべしとなすと。余の見る處を以てすれば是れ大なる誤解なり。蓋し教會なる者は基督の嘗て定めたる處に從ひ、唯神と信者との間に通ずる一の樋管の如きものなり。此樋管なくむば基督の教義は混濁なく變質なく正しく吾人に傳はるを得ず、漸く混亂紛糾散漫に流れて遂に害

毒の滲入を防ぐに詮あかるべきこと、かの新教に於て見るが如くあらむ。新教の徒は又此點を誹議して曰ふ、加特力教會は強て神と人との間に介在し、却て兩者の關繫交通を妨碍すと。是れ大に否らず、加特力教徒も同じく直接に神と關渉交通し得ると信ず、唯其關係に就て、或は人間の想像等を混じ誤謬に陷るの虞あるが爲めに、教會は此關係を監督し以て其純潔を保たしむるに過ぎず。去ればこそ加特力教に於ては、かのモルモン或はクェーカー派等の如く、神人兩者の關繫に於て奇怪の妄說を主張することあらざるなれ。余の所信を忌憚なく言はしめば、新教派こそ却て其加特教會に嫁せむとする誹議を自ら負はざるべからざるものありとす。看よ、彼等は自由解釋を標榜して、隨意氣儘に基督の教を曲解し、公教會が之を純潔に保守するに反して、彼等は其信條を攪亂し、信者個々に基督の位を奪ふて自立せるものにあらずや。換言せば彼等は、基督を信ずるにはあらず、自己を信ずと謂ふべきのみ。

難者又曰く、羅馬の教王は加特力教會信徒に對する絶体權を掌握すと稱す、故に諸國の同教會は教王を見ること自國の帝王の如く、從つて天に二日あきも地に二王あるの觀をあす、是れ大に國家の存立を危ふする思想ありと。余此言を聽く一再に止らず、或は新教徒の口より、或は希臘教徒の口より、或は屢々我邦多數の人士の口より此言の繰けるを聞く。余亦嘗て此に惑ひ、親しく或は加特力教徒に質し、若しくは該教會に就て其の教ふる處を聞く、彼等は曰く、教皇は唯伯多祿の繼承者として、基督の約束に從ひ、宗教上に關してのみ其權を有す、宗教上のことは固より一個人として各々信じ且つ行ふべきことにのみに關するものあれば、之を以て秋毫も吾人が國民的思想を抑損すべきにあらざるありと。夫れ教皇の職權其任務は此の如きのみ、之を歷史に稽ふるに、往昔かの西洋諸國が擧げて加特力教を奉せし當時に於ては、教皇が其常の任務以外に出でゝ、時に政事に干與したるも、時勢によりて認容せられたることありき。然れども是れ全く其任務以外のことたり、是れ唯時勢の然らしめし處のみ。故に今日の時勢、現時の思想より見る時は、或は了解に苦むが如き跡ありと雖も、その當時の時勢に於ては却て當然のことたりしなり。去れば最も嚴正なる批評家も諒として、點頭く處は、特に其時勢一般が之を必要とせるものにて、教皇が自ら好むで之を求めし

にはあらずと云ふこと是れあり。玆に於て余は斷言す、此種のこと今日も猶存すべしと謂ふは、是れ實に杞人の憂か、否らずむば徒らに他に鬼胎を懷かしめて、同教の傳播を妨げ、間に乘じて己れを利せむとする狡兒の辭柄のみと。

又新教の某派は、加特力教の唱ふる教皇の不能謬權(アンフヘイビリテ)を故らに曲解して、加特力教徒は、教皇が萬事に就て過失おきを信ずと誣ゆ。余の探究せる處にては、這は大に加特力教徒の信ずる處に異るを見る。彼等は信ずらく、教皇と雖も其の百般の行爲に於て或は過失なきこと保し難し、古來教皇の多數は其德拔群超衆のものなりしと雖も、而も其中多少の誹難を免かるべからざる所業ありし者の存せしことは亦疑を容れず、然れども其の私行上の過失おるものは、延いて教義の眞否に累を及ぼすべきものにあらず。惟ふに基督の伯多祿と其の相續者とに此教權を予へしものは、固と彼等の功績を賞するが爲めにあらず、唯世の終末まで繼續すべきその聖會の爲なりしおり。故に教皇の不能謬は、渠が個人的百般の行爲に關しての謂ひにあらず、又渠が人間的知識に於ける、未だ曾て定義せられざる信條の見解に係りての謂ひにあらず、只教皇として聖會

全般に亘りて、何れか基督の眞正おる教義なるかを裁斷する場合に於てのみ、基督の約束されし此特權に依り、誤謬に陷ることおしとの謂なりと。是に由りて觀れば教皇の此權を非難する者は、毎に此點に於て過てるや瞭かなり。

尙他の難者は曰ふ、羅馬教皇は隨意勝手に或は信條を變更し、或は新信條を粘出すと。是亦大に謬れる說なりと余は信ず。此る說をおす者は恐らくは信條の何者おるかに就て正しき觀念を有せざるより、斯る誤解に陷れるものならむ。抑も信條おる者は死せる眞理にあらず、活ける眞理にして宛かもかの草木の成長するが如く、人間の發達するが如く、成長發達すべきものたるなり、即ち人間の幼孩より漸次發達して壯齡に至るも、其者は曾て別人たるにあらず、樹木の種子より出でゝ嫩芽を生じ、頓て成長して雲を凌ぐ大樹とおるもその樹は終始同一樹おるが如く、嘗て幼稚の時代に、僅々數個の信條に包含せられたるものは、歲月と共に發達して、漸く精密に定義せられ、倍倍明白に趣くと雖ども、信條其者は從來のものと毫も異別おるにあらず、唯前には隱約の間に包含せられたる者、後には明瞭的確に定義せられしと云ふに過ぎず。基督が

その教會に賦預せし權は決して新なる信條を設くるが爲めにあらず、唯基督の立てたる信條を時勢の要に應じて精密に定義し、明確に教誨すべき爲めありしなり。されば教會は此權に據りて、樹木の種子中に包含せられし如く、嘗て信條中に含まれし處を、代々に發展せしめ、之を精密に定義し來りしなり。是れ生物界一般の通則にして、活ける信條も亦此通則に洩れず、年を閲し世の移るに從ひ、或は論議の趨勢により、或は科學の進歩により、未だ曾て一定の義を附せられざりし信仰の某點に就て、茲に信條を確定するの必要起ることあり。此場合に際すれば、司教等は先づ集會を開いて世世に傳はれる信條を精細に研究し、然る後ち教皇は基督の約束せし特權を以て、之を裁可し、信條即ち信ずべき事と定むるあり。是れかの教會なる者は生活組織を有するが故に、恰かも動物の體機がその生活の原力(プリンシップ)によりて發達するが如く、かの偖に在るべしと約されし神の力によりて、謬あく成長發達するものとあす。新教諸派は之に反して、その加特力教會より分離せし以來、啻に成長發達せざるのみあらず、漸々壞頽し腐敗して、單に人間の隨意勝手に左右する教とはなり了りぬ。

此他猶世の難者が加特力教に加へし非難異議の點を列擧せば、僕を代ふるも猶盡さざるの概あり、然れども其詳を探り細を究むるは徒らに諸君を煩はすの恐あり。去れば以上主要あるもの三四に止め、茲に吾徒が研究はその結局に到達せるものと爲さむ。

顧みて吾徒が研究の徑路を追想すれば、その發途より此に至るまで、廣撫し採集し獲たる處又甚だ尠きにあらず。今こゝにそが要點を摘むで記さむに、先づ人間自然の心性中に、かの宗教的感情あるものゝ存するを認め、此感情に應ずべき客觀的實在の存ずべきことを推測し、次で此感情の表出せられたる一般の宗教を研究して、宗教あるべき者は人間と人間以上に在る最上實在との關繫あるを認め、此關係を確かめむ爲め、かの形而上界に關する眞理を發見せんとするも、這は經驗に徴して到底人智の能し得べからざる處あるを曉り、從て眞正ある宗教を證明せむが爲めには、必ずやかの至上存在者の親しく與ふる正確なる標準に須たざるべからずてふことを基礎原理として、而して宗教あるものは固より實際的の事あれば、確かに既に人間界に行はれ在るべきを推定し、乃ち何れの宗教が最上實在者より啓示せる特徴を以て證明せらるゝかを究めむ

が爲め、歩を進めて世に存在せる重なる幾多の宗教を探究せり。此探究の範圍に入り來りしは、上は太古時代の宗教より、婆羅門教、佛教、猶太教、回々教及び基督教の諸教に渉り、逐一研鑽の結果、最上實在者より予へし確乎たる標證を有するものは、唯基督教一あるのみと決定せり。されば基督教は神授の教なること明かなりと雖も、而も基督の名を標榜とせる幾多の宗教ありて、只僅々たる要點を除外し、互に相牴牾し相矛盾せる異教義を有するを見れば、其間必ず私説の混入せるものあり、純乎として最上實在即ち神より傳へられたる儘の教を保有するものは、一ありて二あるべからざるを思ひ、更に一歩を進めて基督の眞正なる教は何れに在るやを探尋し、茲に基督の眞正なる教義は加特力教に依つて純乎として保有せらるゝを見たり。加特力教即ち公教は萬古不易の眞教なり、千載不磨の基礎に立ち遠く他教に超出すとは、今や吾徒の斷言するに憚からざる處なり、是れ吾徒が此研究會に於て經過し來りたる徑路とす。憶ふに吾徒の此徑路を進行するや、頗る疾速に歩を移せしが故に、諸君の中或は途上の詳狀細景に眼を逸せしものあるやも知るべからず。倘し諸君にして再び徐ろに此徑路を蹈破せば、其詳細の狀景は之を掌に指すが如く、衆て岐路に踏み迷ふの虞あらざるべし。就中公教界の眞理を精密詳細に檢覈探究するの曉には、決して世の人の信ずるが如く、淺薄或は奇怪の誕妄にはあらずして、高妙幽玄なる哲理を有し、眞に人間の宗教心を滿足せしむるに足る善美の宗教たるを知るに至らむ。事茲に至れば我研究會の目的は既に十分に達せられたるものなり。若し否らずして是まで研鑽し來れる處に止まるも、優に宗教の試金石として、そが眞僞を鑒別するの器には足りぬべし。果して然らば吾徒の勞は酬いられたりと謂つ可き哉。

宗教の試金石

終

明治三十四年十二月十日印刷
同年十二月十五日發行

著者　クレマン、ルモアメ
筆記者　工藤應之
東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　堀川柳助
東京市京橋區築地一丁目十八番地
印刷者　河本龜之助
東京市神田區錦町一丁目十番地
發行所　三才社
東京市京橋區築地二丁目廿二番地
印刷所　株式會社　國光社印刷部

Ерш 68

30
188

013643-000-6

30-188

宗教之試金石

クレマン・ルモアヌ／述

M34
ABA-0112